

Magical Girl Lyrical NANOHA ZERO

shimoyuki

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

闇の書事件から一年半。なのはは小学五年生として、慌ただしくも楽しい日々を送っていた。

そんなある日、とあるロストログアの捜索隊に同行することになったのはとフェイトは、そこで謎の魔導師と交戦することになる。

ほぼ同時に、レイジングハートが原因不明の不調に陥ってしまう。それらの出来事を皮切りに、なのはの周りで日常が音を立てて崩れて行く。

狙われたロストログア——『サイケロッド』とは何なのか。

謎の魔導師とは何者なのか。

レイジングハートの不調の原因とは。

そして、それらの情報を頑なに開示せず、不穏な動きを見せる管理局上層部。

彼らは一体、何を知っているのか。

あらゆる要因が複雑に絡み合い、破滅の歯車が今、ゆっくりと回り出す。

もしかしたらあったかもしれない、こんな展開。

もしかしたらあったかもしれない、こんな真実。

もしかしたらあったかもしれない、こんな終わり。

M a g i c a l G i r l L y r i c a l
E R O、始まります。
N A N O H A
Z

目次

第一章 (Beginning of the End)

零話	『胎動』	—	1
1話	『予兆』	①	5
1話	『予兆』	②	17
1話	『予兆』	③	29
1話	『予兆』	④	41
2話	『襲撃』	①	54
2話	『襲撃』	②	64
2話	『襲撃』	③	73
2話	『襲撃』	④	84
3話	『変動』	①	93
3話	『変動』	②	98

け次第別紙にて提出する。
以上。

E R O
M a g i c a l
G i r l
L y r i c a l
N A N O H A
Z

一章 — B e g i n n i n g
o f
t h e
E n d —

1話 『予兆』 ①

季節は移ろいゆく。例えどんなことがあっても、時は無常に、平等に流れる。

早朝。時刻は午前五時半。

月日は九月二十四日、月曜日。日中はまだ汗ばむ陽気が続く海鳴市だが、薄らと朝靄が立ち込めるここ、桜台林道はひんやりと肌寒い。

日の出直後の林道はまだ薄暗く、そして静かである。住宅街から離れている故、聞こえてくる音と言えば微かな葉擦れや、小鳥の囀り程度のものである。夜と朝の境目の空気に満ちた林道は、荘厳とも言える雰囲気醸し出していた。

そんな林道の脇にある、少し開けた広場。

その中央にいるのは、クリーム色のパーカーと桜色のスカートに身を包んだ、小柄な一人の少女。

髪をツインテールに束ねた少女の名は、高町なのは。今日も日課である魔法の練習に勤しんでいた。

「レイジングハート。結界のチェックお願い」

なのはの声に応じるように、その胸元でペンダントになっている赤く丸い宝石——レイジングハートが一瞬光沢を放つ。

《——No problem. (問題ありません)》

「オッケー。じゃ、行くよ」

なのはが目を閉じ、集中して己の内にある魔力を意識する。すると足元に魔法陣が形成され、次第に桜色の光彩がなのはの周りに浮かび上がる——魔力光だ。

ほぼ二年半行っているトレーニングは、なのはにとって呼吸するのと同義だ。流れるような動作で、魔法の起動、発現、行使とスムーズに行う。

内容は基礎の基礎だが、なのははそれを怠らない。魔法を使う時は、トレーニング時であっても、実践時であっても、結局根底を司るのは魔法の基礎運用である。本来本場の魔法学校でじっくり学ぶよ

うなことを、なのはは幾多のぶっつけ本番の実践を経てそれを感得し切っていた。

「……………」

なのはトレニングをしながら、ふと思い返す。

レイジングハートと出会い、ユーノと出会い、時空管理局の皆と出会い、フェイトと出会い、ヴォルケンリッターやリインフォース、そしてその主であるはやと出会い――そして管理局へ入局を果たしてから、そろそろ一年半が経とうとしていた。

今のところ闇の書事件以後、大きな事件はこれといって発生していない。だからと言って、忙しくないわけではない。

何だかんだ言っても、地球ではなのははまだ極々普通の小学五年生。学校に行くだけでも体力や頭を使うのに、加えて教導官になるための大人でも音を上げるような研修プログラムだ。故になのはは（フェイトとはやてもだが）学校以外の時間を基本的に管理局で過ごしている。

明らかに多忙極まるスケジュールではあるが、そんなに苦ではないとは本人の談。とは言え周囲の人間は結構気を遣っていたりするのだが。

それでも実際なところ、苦ではないが楽というわけでもないのはなのも自覚していた。研修だつて周りは大人ばかりだし、子供だからと言ってトレーニングの内容が軽くなるわけでもない。しかし、このままではダメだ、という向上心がなのはの心には常にあった。

偶然とは言え、身につけた魔導の力。そしてそれは、誰かを救うことの出来る力。

誰かの役に立てる力だ。もう、自分の無力さに苛まれずに済む力だ。

かつて何も出来ずに苦しんだ日々があった。だからなのは、今の充実した自分を精一杯享受する。

そしていつだって思う。誰であっても目の前で傷ついてほしくない、と。

だから今日もなのはは魔法を使う。

この力がまたいつか、誰かを助けることが出来るのだと信じて。

「……………ふう」

ほぼ瞑想に近い感覚の中、二時間のトレーニングはなのはの体感時間としてはあつという間だった。

一息吐き、近くのベンチに歩み寄る。そこに置いてある、持参してきたミネラルウォーター入りのペットボトルに口をつけて喉を潤している、レイジングハートが瞬きを見せた。

《Today, it was a careful training than usual. (今日はいつもより入念でしたね)》

なのはは頷く。

「今日は学校が終わってから、フェイトちゃんと組んでシグナムさんとヴィータちゃんとの模擬戦訓練があるから。あとその後にクロノ君から頼まれてるお仕事もあるし。しっかり準備運動はしとかなくちやね」

《……………You look fun, master. (楽しそうですね、マスター)》

「うんっ。全力……………とまではいかないけど、それなりの規模の模擬戦って最近やってなかったし。確かに教導隊の研修も大切だけど、やっぱりブレイカーみたいな大技は定期的に試射しないと鈍っちゃいそうで……………それに、空き時間で組んだバリエーションも試してみたのもあるかなー」

《That's so like my master. (マスターらしいです)》

「にやはは……………」

そうこうしている内に、見上げる位置まで太陽が昇っていた。ここから望む街並みも、まばらに人が行き交っているのが見える。

なのはは静謐とした朝の空気を精一杯肺に吸い込み、深呼吸する。そして視線を海原へと向け、広々とした視界を前に気持ち新たにする。

これもまた、一連の儀式みたいなものだ。こうすることで、なのはは今日も一日頑張れる気がすると感じている。

「——よしっ！ 行こっか、レイジングハート」

《All right, my master. (了解です、マスター)》
今日もまた、一日が始まる。

「行つてきまーす！」

家族と一緒に朝食を食べ、なのはは学校指定の鞆を背負って軽快に家を出る。

行き先は通学路の途中にある児童公園。登校時の彼女らとの待ち合わせ場所だ。

五分ほど歩いただろうか。公園が見えてきた。

通学路なので、なのはの通う学校の制服姿の子どもが先程からちらほら現れ、なのはと進行方向を同じくする。そんな中、公園の入り口付近に二人の少女——栗色のショートヘアの娘と、金髪のツインテールの娘が佇んでいるのが見えた。

すると、ショートヘアの娘——八神はやてがなのはに気付き、手を振ってきた。隣のツインテールの少女——フェイト・テストアロツサも、慎ましやかになのはへと頬笑みを見せる。二人共、なのはの唯一無二の友人だ。

なのはは自然と駆け足になり、彼女達の下へと急いだ。

「おはよう、フェイトちゃん、はやてちゃん」

改めてフェイトとはやても、なのはに向き直る。

「おはよう、なのは」

「おはようさん、なのはちゃん」

朝の挨拶を交わし、三人は誰からともなく自然と歩き始める。フェイトやはやてと出会う前は一人で登校していたなのはだったが、二人と出会ってからいつしかこの短い時間も一日の中の楽しみの一つとなっている。

「それにしても今日は二人の方が早かったね。もしかして待った？」

「ううん。私もついさつき来たところ。ちよっと早目に目が覚めちゃって……」

「私もや。なんや珍しいこともあるもんやな。て言うか、なのはちやんがいつも早起きすぎるんとちやうか？ 確か毎日五時に起きて魔法の練習してるんやて？ これ以上強なってどうするつもりなんやー？」

はやての茶化した言葉に、なのはは苦笑する。

「そんな、私なんてまだまだだよ。この前の教導官の研修でも、結構散々な目に遭ったし……」

「それって、なのはが先週末に下士官の人達と五対一で戦ったって言ってた、あれ？」

「……五対一？」

「そうそうそれそれ。制限付きとは言え何とか勝てただけど、まだ立ち回りと射撃精度に課題が残ってる感じかなあ」

さらっととんでもないことを言うなのはに、はやてが怪訝な表情になる。

「もしかしてなのはちゃんだけ特別なスパルタメニューでも組まされてるんとちやうか……？ 私かてそんなキツイお灸据えられたことないで。なあ、フェイトちゃん」

「ま、まあ執務官コースの私や捜査官コースのはやてと違って、なのはは実践メインの部署だから……」

「うーん……どーなんだろ……？ あ、そうそうフェイトちゃん。今日の放課後だけど——」

何気にこの世界では現実離れた話題に花を咲かせていると、いつしか学校はもう目の前だった。

三人が学校の前の横断歩道で信号待ちをしていると、向こう側の車線で黒いリムジンが徐行の末停車した。まず運転席から初老の男性が降り、恭しい挙動で開いた後部座席から二人の少女が降りてくる。

顔を見ずとも分かる。あんな車で登校してくる児童を、なのはは彼女達しか知らない。ちやうど信号が変わるや否や、なのはは二人の少女——アリサとすずかへと声をかけた。

「おはよう、アリサちゃん、すずかちゃん」

アリサとすずかがなのは達に気付き、挨拶を返す。

「おはよう、なのは。フェイトとはやては？　って後ろにいたのね。おはよう」

「おはよう、みんな」

今ではお馴染みの五人が集まり、揃って校舎へと入る。

昇降口で上履きに履き替えながら、アリサが溜め息を吐いた。

「はあ……一時間目から体育の日は憂鬱だわ」

「でもアリサちゃん、体育の成績悪くないでしょ？　私なんて……」

「成績良いのと好きなのは別よ。て言うか、アンタ本当に体育苦手よね？　本当に、その何だったっけ、空戦魔導師のエースなんて呼ばれてるわけ？」

「あうう……言わないで……」

そこですかさずフェイトが助け船を出す。

「大丈夫だよ、なのは。今年は私が体育委員になったし、体育の時間も色々フォローしてあげるから」

「フェイトちゃん……」

見つめ合うのはとフェイト。今日も二人は平常運転のようだった。特にフェイトの方が。

そんな二人を眺めながら、はやてはどこか嬉しそうに頬を緩ませる。

「今日もなのはちゃんとフェイトちゃんはベタベタやなあ」

「ってアンタ！　そんな恣意的な理由で体育委員になったんかいっ！」

「フェイトちゃん、なのはちゃん大好きだもんね」

アリサがツツコミを入れ、さすがが微笑して温かく二人を見守る。

「そ、そんな大好きだなんて……」

「あーフェイトちゃん照れとるー可愛いなあうりうりー」

「あう、ちよ、や——ってどこ触ってるのはやて!?!」

「ちよつとはやてちゃーん、私のフェイトちゃんを勝手にいじらないでくれますかー?」

「ふふっ、ラブラブだねー」

「はあく……見てらんないわ、まったく……」

ワイワイ騒ぎながら、五人は教室へと歩を進める。
いつもの光景。いつもの朝の一時。

今まで過ごしてきた、そしてこれからも続くであろう日常のワンシーン。何にも代えがたい掛け替えのないものであり、ずっと大切にしていきたいものだ。

勿論楽しいことばかりではなく、この先辛いことも起こるだろう。悲しいことも起こるだろう。

だけど、今は自分の周りにはこんなにも温かい人達がいる。時に守り、時に守られ、助け合える仲間達だ。そんな人達との毎日を、なのはこれ以上なく幸福に感じていた。

だからなのは笑う。この境遇を享受する。

皆となら、例えどんな困難であつても乗り越えていけるだろう。今までがそうだったのだ。これからもきつと、そうに違いない。

そう、信じていた。

だって、こんなにも当たり前に傍にあるものなのだから。

そう、強く思っていた。

今日という日までは。

くくくくくくくく

薄暗い部屋だ。奥行きが見えないほど広々とした部屋には照明器具などなく、代わりに至る所に設置されたモニターやコンソールから浮かび上がる茫とした光が点在している。

研究室を思わせる部屋の構造だが、そこには人の気配がまるでない。ただ一人で機械がプログラム通りに稼働し、モニターやヒーターが作動する無機質な音のみが低く響いているのみ。

そんな伽藍とした空気が漂う部屋の中央に、一際明るい光源があった。

その前に一つの人影が佇んでいる。男だ。歳は外見上二十代後半。金色の長髪が背にしな垂れ、まるで女のようなようであるが、その顔付きは

精悍としており、流石は時空管理局の執務官を任されているだけのことはある風格を漂わせていた。

男——オズワルド・シモンズは、一通りの報告を終え、『彼ら』の返事を待っていた。

何分経つただろうか。長い沈黙から、『彼ら』の一人がゆつくりと喋りだした。

「……………解読の進捗状況は？」

「現在23%まで進んでいます。その時点で既に例のデバイスについて言及が為されています。…………やはり一連の『鍵』で間違いないかと」

「他の『鍵』の場所については？」

「未だ解読中です。最短でも後三日は要するかと。記述されている文字のベースは古代ベルカ語ですが、細部が我々の知るものとは若干違っているので、思ったより時間がかかっているのが現状です」

「聖王教会のあの女は何と言っている？」

「貴方方が考えておられることとほぼ相違ないでしょう。『二つの月が交わる時、終わりを告げる第一の笛が鳴り響く。地の底より現れし亡霊、最早何人たりとも止めること叶わず。十の遺物、ついに破壊の輝きをもたらさん』。…………解読結果とほぼ一致しています。念のため後ほど教会の方にも例のデバイスの解析を委託するつもりなので、ご了承願います」

「果たしてそこまで時間が残されているものなのか」

「だが今は精度の高い情報が必要だ。今『逆しまの書』は我々の手にある。それを有効活用し、何としてでも先手を取らねばならぬ」

「…………それにしても、本当にアレが目覚めるとでも言うのか？」

「裏付けは既に幾つかあります。恐らくは十年前のあの集団でしょう。貴方方が言う通り、次こそこちらが先手を取らないと、今回は取り返しのつかないことになると考えられます」

「当然だ。アレは本来ある筈のないモノとして扱わねばならぬ。事が公になる前に、何としてでも事態を收拾せねばならぬ」

「対策はどうなのだ？」

「勿論十全に。再びむぎむぎとやられることはしません。そのためには——よろしいですね？ 御歴々」

「構わぬ。その程度、ミッドチルダ——いや、この全次元世界と天秤にかけるまでもない。考慮するまでもない些事だ」

「左様。大事の前の小事。我々はそれを取り違えてはならぬ」

「うむ。……ならば計画をこのまま進めるがよい。アレの復活は、断じて阻止しなければならぬ。我々が命懸けで封印した過去の遺物……再び目覚めるようなことになれば、全てが終わってしまいかねん。現場の統括は全て貴様に一任する。全力を以て、これの対応に当たれ」

「——御意に」

一礼し、オズワルドは踵を返して『彼ら』に背を向ける。

革靴の足音が遠ざかる。

再び静寂。

誰も知らないところで、何かが動き出す。

静かに、しかし着実に。

世界はまだ、平穏に満ちている。

今は、まだ。

くくくくくくくく

昼休みになると、なのは達は屋上へと移動する。特に天候が悪くなければ、屋上はいつも解放されている。昼休みの間はどこで過ごしてもいいことになっているので、いつも彼女達はそこで昼食を食べることもとなっている。

昔はなのはとアリサとすずかの三人だったが、今はフェイトとはやてもおり、一際賑やかさが増した、とはすずかの言葉。

殆ど恒例となっている、互いのお弁当のおかずの交換会が行われていると、アリサが思い出したように言った。

「そう言えばさ、昨日新しいゲーム仕入れたのよ」

「仕入れた……う？　って、どういう意味？　買った、じゃなくて？」
「さすがが訊ねると、アリサは自慢げに胸を逸らした。

「パパの知り合いに任○堂の人がいてね、新作のゲームのテストプレイをやってみないか？　って申し出があったんだって。ほら、再来月出る棒みたいなコントローラーで操作するあれ」

「あつ！　それテレビでやってた！」

「私も知ってるで。CM見てるヴィータがなんや欲しそうにしてたわ。なんかそれでテニスとか野球とか実際にやってるみたいにプレイ出来んねんやろ？　こう、棒を振り回す感じで」

「へえ……なんだか楽しそう」

三人が食いつくと、アリサはしたり顔で続ける。

「じゃあさ、今日放課後うちでやってかない？　今日私もさすがも習い事休みだしさ」

その言葉を聞き、なのは達の表情が曇る。

「ご、ごめんアリサちゃん……今日私達向こうでお仕事が……」

「私も……ごめんアリサ……」

「えーっ。また？　と言うことは、はやても？」

はやてもバツの悪そうな顔をして頬をかきながら、歯切れ悪そうに切り出す。

「あはは……実は私もや……て言うか、なのはちゃんとフェイトちゃんも、なんや呼び出されてるんか？」

「ううん、私とフェイトちゃんは戦技演習。模擬戦の申請は前々からしてたみたいなんだけど、なかなか空きが出なくて一昨日やっと連絡が来たところなの。はやてちゃんは？」

「私か？　昨日の夜にレティ提督から通信があって、明日の放課後にも来てくれて言われてなあ。多分また捜査官の雑用なんやろうけど」

「そうなんだ……本当にゴメンね、アリサちゃん。明日以降なら遊べるけど、どうかな？」

申し訳なく両手を重ねるなのはに、アリサは仕方なさそうに嘆息する。

「もう……別に用事があるんならこつちから文句は言わないけど。だったら、次の日曜日になるかしらね。さすが朝に習い事あるから、お昼からどう？ どうせならウチでご馳走するし」

「うんっ、大丈夫。フェイトちゃんとはやてちゃんも、どう？」

「私はフリーだよ。問題ない」

「うん、ええで。ほんならウチのお昼は……折角やし、最近お料理に精が出始めたシャマルにでも頼んどこうかな」

この瞬間、公園で老人会のゲートボールに参加していたヴィータと、庭で竹刀を両手に素振りをしていたシグナムと、リビングで昼寝をしていたザフィーラが謎の寒気を感じたのは別の話。

ともかく週末の予定が決まったことで、一同は気を取り直して昨日のテレビの話題や家族の話題といった、他愛もない話に花を咲かせることとなった。

それはまたいつもの昼休み。平和な時間。平穏な時間。

……の、はずなのだが――

「……………」

どうしてだろうか。

アリサは、言いも知れぬ違和感を覚えていた。

その原因が何であるのかは分からない。ただ漠然とした不安が、胸の底に蟠っている。

目の前にあるのは、何の変わりもないいつもの光景だ。不安に思うことなんて、何一つとしてない。

なのに――

「ね、ねえ、なのは」

「ん？ なぁに、アリサちゃん」

「今度の日曜日さ、来てくれるわよね？」

するとなのはは一度目ぱちくりさせて、
「ふえ？ もう、さっき約束したじゃない。絶対行くよ。ね、フェイトちゃん、はやてちゃん」

「うん。だから、今日はゴメンね、アリサ」

「お菓子の差し入れも持ってってあげるからな」

何故自分はそんな確認をしたのだろう。自分でもよく分からないまま、アリサはなのは達の声を聞いて何度か頷く。

「そ、そうよね。さつき約束したわよね。あはは……」

「？ 変なアリサちゃん」

屈託のない表情で、なのはが首を傾げる。

だけど、アリサの胸につつかえるようにとぐろを巻く不安は、なかなか消えてくれなかった。

何故か、どうしても、なのは達と次の日曜日に遊べる気がしなかったから。

その原因はやはり分からない。もしかしたら急な用事が彼女達に出来てしまうのかもしれない。それならまだいい。そんなことよりも――

(……やめやめ。何縁起でもないこと……)

アリサはマイナス思考をシャットダウンする。なのは達は先日商店街に出来たペットショップの話題に忙しい。そこなら昨日自分も行ったばかりだ。ダルメシアンの仔犬が一際可愛かったのを覚えている。

アリサは気を取り直して、白熱しているペット談義に加わることにした。

1話 『予兆』 ②

「それじゃ、また明日ね、みんな」

「うん。また明日ー」

「日曜日、ちゃんと予定開けときなさいよー」

「うん。そうしとく」

「ほななーお二人さん」

送迎車に乗り込むアリサとすすかを見送り、なのは、フェイト、はやての三人も学校を後にする。

帰り道は三人共公園まで一緒だ。そこからの進行方向は、なのははそのまま直進、はやては公園を横切る形で、フェイトは目の前の横断歩道を渡って散り散りになる。

「今日もレティ提督に呼び出されてたけど、捜査官のお仕事ってどんな感じなの？」

何となくなのはが切り出すと、はやては「せやなあ」と呟く。

「こつちで言う警察みたいなもんやからなあ。加えて、各部署で何か面倒事があったらその都度出向する、言うてしまえば『何でも屋』やな。今はまだ上官の側で研修中で、ウィータ達に手伝わってもらったりと未熟者やけど、これから色々任される思うたら、ちよつと気疲れしてしまいそうや」

苦笑するはやて。はやてが就いているのは、捜査官の中でもレアスキル保有者が主に就任する、『特別捜査官』という役職だ。それについての知識はなのはやフェイトも有しているが、本人の口から直接聞かされると改めて大変そうだという共感を覚えた。

「でも今日はウィータとシグナムも私達と模擬戦だけど……」

「うん。今日は珍しく私だけ呼び出されたんよ。何か失敗やらかしてしもうたんかなあ……」

「もしかしたら昇進のお知らせかも」

「あはは……ないない。少なくとも今の立場で後三年は経験積まんと、次のステップには行かれへんらしいからなあ。一人前になる頃には、多分中学生か高校生やね」

「そっか……実は私もそんな感じ。先は長いなあ。フェイトちゃんも確か、今執務官の試験の勉強やってるんだっけ？」

「うん。クロノやエイミーに色々見てもらってるけど、思ったより厳しくて……で、でも頑張るよ。皆の期待にちゃんと応えなくちゃいけないし、それよりも私自身が絶対なるって決めたし……」

か細げな声ながらも、強い意志を感じさせるフェイトの口調に、なのはは明るい笑顔を見せる。

「大丈夫だよ。フェイトちゃんなら、きっと上手くいくよ」

「せやせや。私らフェイトちゃんが頑張り屋さんなん、よお知つとる。試験受けても、一発でパスする筈やで」

「うん……ありがとう、なのは、はやて」

そうこうしている内に、帰路の分かれ道である公園に三人は到着する。

「ほななーお二人さん」

「じゃあねー、はやてちゃん。フェイトちゃんは、また後で。訓練室前に、三十分後くらいでいい？」

「うん、分かった。——はやて、また明日」

互いに手を振り、そして三人は各々の自宅に向かって歩き出した。

く八神宅く

「ただいまー」

はやてが玄関のドアを開けると、真つ先にヴィータが駆けてきた。

「おかえりーはやてー」

大きく結ったお下げを揺らしながら軽く抱きついてきたヴィータを、はやては優しく抱き返す。そしてあやすように頭を撫でながら、

「ただいま、ヴィータ。家にはヴィータ一人か？」

「ううん、リビングに全員いるよ。なんか結局シヤマルとザフィーラも管理局に用事が出来たみたいで、結局全員で行くことになるって」

「なんや、そうなん？」

「えつとね、シヤマルは医療局に出向で、ザフィーラは何かよく分かん

ないけど力仕事の雑用で呼ばれたみたい。まあ特に急いでないから、はやてが帰ってくるまで皆待つてるみたいだけど」

「そか。ほんなら、出かける前にちよっとお茶でもしよか。ちようど冷蔵庫に昨日行きつけの八百屋さんからもろてきた梨もあることやし。食べるやる？ ヴィータも」

ヴィータは見る見る内に顔を綻ばせ、大きく頷いた。

「うんっ！ 食べる食べる！」

「よっしや。そしたら食器の用意してもらおかな」

「りよーかいっ！」

踵を返して、ヴィータがリビングへとすっ飛んで行く。

そんな慌ただしげなヴィータを瞳で追ってからは、はやてもリビングへと続いた。

「すると、主はやては本来の仕事で呼び出されたわけですね？」

皆でシヤリシヤリと梨を食べる中（ザフィーラは相変わらず床に皿を置かれてるが）、シグナムはそうはやてに問うた。

「そうなるなあ。いつもなら皆と一緒に召集かかんねんけど……」

特別捜査官という役割、担当する事件は実に様々だ。現場では何が起こるか分からないのが常である。クロノ等のような、十代前半で現場に赴く局員もいることはいるが、殆ど例外の域である。

能力はあるとは言え、はやてはまだ十一歳の少女だ。いずれは一人前になることが目標ではあるが、まだ彼女をサポートする人員が必要だという管理局側の判断で、今のところ総務部（特別捜査官の管轄である）に向向する時は、基本的にヴォルケンリッターが随伴することとなっている。

加えて、呼び出した人が人である。

レティ・ロウラン。役職は提督。初めて会った時はリンディの友人として紹介され、今の地位を色々取り計らってくれた恩人である。正直はやてにとっては頭が上がない存在だ。

だが、それ以上に驚いたのだが、後から聞くところによるとなんと階級は中将なのだという。当然ながら、管理局の地位的立場において、上から数えた方が圧倒的に高い。

そんな人が、緊急で秘匿通信を用いて単独で呼び出しをするなんて……

(ちよつと変な気はするけど……まあなんや、行ったら分かるやろ)すると口いっばいに梨を頬張り、リスのようになったヴィータが間に割って入る。

「ふえふいへいふおくはあはひはひのふおふお……」

「こーらヴィータ、食べながら喋ったら行儀悪いやろ。いそがへんから、ちゃんと味わって食べ」

はやてに注意され、「ふぁーい」と返事をするヴィータ。

「んぐんぐ……ぷはあっ！　でさ、レティ提督は、アタシ達のこと何も言ってなかったの？」

「んーもしかしたらレティ提督もみんなの予定知ってて、敢えて言わんかっただけかもしれへんなあ」

「でもちよつと初めてのパターンねえ。私達本当についていかななくていいのかしら」

頬に手をやるシャマルの言葉に、シグナムも追隨する。

「そうしたいのは私もやまやまだが……如何せんヴィータと私はこの後外せない模擬戦を控えていることだし……」

「私も、運用部の方に呼び出された故、申し訳ありませんがお供することが出来ません。ご容赦を」

ヴォルケンリッターの面々が済まなさそうに弁明するも、はやては軽く受け流す。

「まあまあ、呼ばれたのは私だけやし、皆は各自のお仕事頑張ってるわ。……はい。そのように」

「何か困ったことがあったら、すぐに呼んでくれて構いませんからね」
「ありがたいな、シャマル。でもまあ、出来るだけ自分の力で何とかしてみるわ。いつまでも皆に頼ってるようじゃ、主失格やからなあ」

そんなはやての言葉に、ヴィータが真つ先の声を上げた。

「そんなことないよ。はやてはちゃんと、立派にアタシ達の主じやんか」

シグナムも、シャマルも、ザフィーラも、声には出さずとも心の中で頷く。

今まで数えきれない程の主に使えてきた彼らが、唯一心を許した主——それが八神はやてという少女だ。戦闘力とか指揮能力とか、実践的なそういつた能力は後からでも十分身につく。他人を思い遣り、他人の気持ちを我が身のように共感することの出来る彼女こそが、自分の主であるとヴォルケンリッターの四人は強く思っていた。

はやては少し驚いた風に目を丸くするが、ふふつと軽く微笑んだ

「……そう思ってくれるんなら、うれしいなあ。それでもいつかは一人で仕事出来るようにならなあかんし、まあそれまでは色々手伝ってもらおかな」

そこでふと空気が物静かになっていることに気づき、はやてが話題を変えようと再度口を開く。

「あはは……なんかちよつとしんみりしてもうたな。そう言えば、みんな時間は大丈夫なんか?」

「私とヴィータはご心配なく」

「私も四時頃に来てって言われたから……あと二、三十分あるわねーザフィーラは?」

「同じ頃合いだ。終わるのはいつになるのか分からぬが……夕飯までには間に合うだろう」

「そしたら、もうちよいゆつくりしよか。お茶、淹れてくるなー」

「あつ、それアタシが行くよ。はやては座ってて」

それからもう少しの間、皆は団欒に花を咲かせた。

はやては思う。何でもないこの時が、いつまでも続けばいいのにと。

くハラオウン宅く

フエイトがリビングでノートを広げていると、ふいに玄関のドアが開く音がした。

没頭しすぎて約束の時間をオーバーしてしまったのか、と一瞬焦って時計を見るが、まだ帰宅してから十分と経っていない。ほっと胸を撫で下ろすと同時に、スーパリーの袋を提げたリンデイがリビングへと入ってきた。

「あら、フエイト。帰ってたの？」

「うん。今さつき。……おかえりなさい、母さん」

一時期はなかなか気恥ずかしくてなかなか言えなかったその一言を、フエイトはそれでもまだ少し頬を赤らめながら口にする。

「ええ、ただいま。って、あら、お勉強中だったのね。学校の宿題？」
「ううん。執務官試験の勉強。クロノが受験の時に使ってたノートを貸してくれたから、それを使って……あと問題集も自作してくれて、今ちよつとずつ頑張ってるよ」

簡単に言っただけのけるフエイトだが、その内容は学校の宿題とは比べ物にならないレベルである。執務官試験と言えば、一次の筆記試験と二次の実技試験の合格率が『それぞれ』十五パーセント以上に、合格者の平均受験回数がなんと七回。その鬼畜さを例えるなら、日本における国家試験の最難関と言われた旧司法試験に匹敵する。

英才教育を受け、エリート街道を歩いてきたクロノでも、一回落ちたほどの難しさだ。……と言っても、それでも十分すぎる経歴であるのだが。

フエイトもまた、幼少期からのリニスの指導によって身についた類稀なる魔力知識と戦闘能力を持っているが、現在魔法法等の執務官として必須である知識の習得に四苦八苦しているところである。

「あらあら、クロノったらそんなことまで……まあ、ああ見えてあの子、結構世話焼きだから」

「そう、なんですか？」

「ええ。エイミーが執務官補佐になりたてだった時も、色々手取り足とり教えてあげてたわねえ。ふふっ、周りからはどっちがサポート役なんだかってからかわれたりもしてたけれど」

今でさえクロノのパートナーとして手腕を振るうエイミイだが、そのような過去があるのを聞いてなんだか自然と笑みがこぼれたフェイトだった。

「あの二人、お似合いですよ。見てて微笑ましいと言うか……」

「そうね。士官教導センターの頃から同期というのもあるけれど、何かどこかで似た者同士というか……あら？　もしかしてフェイトさん、焼きもちだったり？」

少し意地悪そうに口元を緩ませるリンデイに、フェイトが顔を赤くして動揺する。

「そ、そういうんじゃないです」

「本当に〜？」

「えつと、その……もう……母さんのいじわる……」

可愛らしくフェイトが頬を膨らます。何と言うか、リンデイが本気で言っていないとは分かってはいるので、まんまと泡を食ってしまった自分自身が恥ずかしかつたフェイトだった。

リンデイは「ふふつ、ごめんなさいね」と付け加え、

「まあ執務官試験のことだったら、遠慮なく私にも色々訊いてくれていいのよ？」

「えつ？　母さんも試験、受けたことがあるんですか？」

「ええ。と言つてももう十年以上前のことですけど。年々傾向は変わってきているとは言え、試験内容は殆ど一緒だから、アドバイス出来ることもあると思うわよ？　——でもね」

「？」

ふつとリンデイの目付きが一層穏やかになる。フェイトに向けられる表情は、紛れもなく我が子を慈しむ母親のそれだった。

「無理だけはしちやダメよ？　貴女が執務官になろうと思ってることはとても素晴らしいことだと思うし、私も応援してる。それでも貴女は学校に行つて、友達と遊んで……そういった毎日を楽しむ権利があるわ」

「……うん」

「目標は大切だけど、そればかりに目を奪われないようにね。疲れた

ら、いつでも言ってちょうだい。私でよければ全力で胸を貸してあげるわ」

「うん……ありがとう、母さん」

親子の絆を再認するように言葉を交わした後、リンデイは紅茶を淹れにキツチンへと向かった。

フェイトは問題集に視線を落とすが、そのままゆつくりと目を閉じて静かに思った。

何でもないこの時が、いつまでも続けばいいのにと。

〈高町宅〉

なのはの自室。机に座るなのはの眼前には、魔法陣を媒体として出現している空中投影ディスプレイ——空間モニターが展開されていた。

バストアップで画面に映っているのは、ユーノだ。彼の背景から見るに、どうやらいつも通り無限書庫での作業中のようなのである。

「今日はゴメンね、ユーノ君。そっちもお仕事あるのに……」

両手を顔の前で合わせ、謝罪の言葉を口にするのはだが、ユーノは特に気にしたようすもなく笑い返す。

「別に全然気にしてないよ。訓練用の結界を張りに行くくらい。それに、ここ最近ずっとここで働き詰めだったから、ちよつと気分転換したかったところだし。寧ろ有り難いよ。ははっ」

「えつと……本当に大丈夫……?」

「大丈夫大丈夫……それに好きでやってることだしね。遣り甲斐はあるし」

だがそう言うユーノの顔は、心なしかやつれて見えた。無限書庫の司書長になって、早一年。まだ発言権も弱いからか碌に人員も回されず、ユーノは心の中で溜め息を吐く。

一応クロノに幾度か申請はしているのだが、まあ彼も彼で苦勞しているようだった。どうやら艦長になるためのキャリア積みで、夏頃から多忙らしい。流石にポストの重要度が違うので、ユーノもあまり大

きく声を出せず、結局現状維持が続いている状態だ。

時空管理局に関わる前までは、あそこは実はブラックだと風の噂で耳にしたことがあったが、どうも自分はそれを今身を以て知っているようだ。まあ待遇云々は置いて、実際周りの人間は良い人ばかりだから強ち百パーセントそうとは言いい切れないのだが。

それに、若干潤んだ瞳で申し訳なさそうに僅かに首を傾げるなのはを前に、一体どの口で文句を吐けようか。あんな顔されたら何でも許さざるを得ない。恋愛感情とかそういう自覚はないが、なのはに對してはいつもどこか甘くなってしまう自分がいると、ふと思うユーノだった。

「なのはこそ、教導隊の下士官候補生だっけ？ 研修、結構厳しいって聞くけど」

「うん、まあ、それなりにね。でもやるべきことがハッキリしてるから、辛いとは思わないよ。魔法使うの、楽しいし」

「そっか。まあ、無茶はしないようにね」

「ユーノ君こそ」

互いに向かい合っていたが、どちらともなく可笑しげに二人は笑いだす。

「あ、今度翠屋のお菓子差し入れしてあげよっか。今日呼びだしちゃったお詫び」

「え？ お詫びだなんてそんな……」

「いいのいいの。今旬のフルーツタルトがね、すっごくおいしいの」

「へえ。じゃあ、楽しみにしておくよ」

「うんっ」

その後、なのははユーノとお互いの最近のことについて話していると、レイジングハートが桜色の澄んだ輝きを見せた。

《It's about time, master(そろそろ時間です、マスター)》

「えっ？…もうっ？」

なのはが机の端にある置時計を見ると、待ち合わせの時間の五分前だった。

「ユーノ君、それじゃあ……」

「うん。アースラの転送ポートを作動してくるよ。二、三分そこで待っててくれる?」

「分かった。また後でね」

ユーノが頷き、空間モニターが閉じられる。

なのはは一度目を閉じ、背もたれに寄りかかって天井を仰ぐ。

そして両手を組み、グツと大きく伸びをする。

そのままボーっとしてしていると、レイジングハートがなのはの視界の端で光った。

《Do you have worries? (悩み事ですか?)》

些か遠慮がちな彼女の声に、なのはは苦笑で返した。

「あはは……分かつちやう?」

《I'm your device. (私は貴女のデバイスですから)》

お見通し、というわけだろうか。凶星を指されたなのはだったが、それよりも自分の気持ちを押し量ってくれたレイジングハートを愛おしく思った。

なのははゆっくりとベッドへと移動して、すんと腰を下ろした。

そして俯き加減で、ぽつりと言葉を漏らす。

「……たまにね、もっと強くならなきゃって、無性に思う時があるんだ。そんなすぐになれるわけないのは当然だけど、何と言うか、今までが今までだったから……そりゃ今の訓練も大切なことが分かってるけど、それでも……あーっ! 上手く言葉に出来ないなあ………なんか、まだまだだね、私って」

頭を抱え、懊悩するなのは。それは贅沢な悩みであることは自覚していた。最初から豊潤な魔力を有していた故の、贅沢な悩み。だからこそ、こんなところで足踏みしていることに、なのはは焦りを覚えていた。

もっと、誰かの役に立ちたい。かつてそれが出来なかったことに対する反動が、今になって押し寄せてきたのだった。

すると、レイジングハートは「大体言いたいことは分かった」といったように、数度点滅した。

《Take it easy. There's more to come, master》(焦る必要はありません。これからですよ、マスター)《

「……レイジングハート……」

短い言葉。だが、変に飾った励ましを受けるよりか、そっちの方がずっと心に染みた気がした。

さつき彼女は、自分はなのはのデバイスだから、と言ったが、それは間違っている。

その程度の関係などではない。初めて自分を心から受け入れたレイジングハートは、自分の半身と言ってもいい。普段が当たり前すぎて思いもしなかったが、今改めてなのははそう感じた。

なのはは肺に溜まっていた重たい空気を吐き出し、レイジングハートに向き直った。

「……ん。頑張る。ゴメンね、変なこと言っちゃって」

《Don't worry. (お気になさらず)》

そうする内に、部屋の中央にミッド式の魔法陣が出現した。どうやら向こうの方で準備は整ったらしい。

気を取り直して、なのはは立ち上がる。そして机の上に置いていたレイジングハートを手に取り、微笑みかけた。

「行くよ、レイジングハート」

《Ok. (了解です)》

なのはが魔法陣の中心に立つ。すぐに転送ポートが開き、魔力光が部屋全体を満たす。そして次の瞬間には――

悩みもある。辛い時もある。だけど、それでもやっぱり自分を支えてくれる人がいる。

自分では気づかないことを、周りのみんなは教えてくれる。

そんな毎日が、とても愛おしい。

そしてなのははそっと思う。

何でもないこの時が、いつまでも続けばいいのにと。

しかし、永遠なんてものはない。
何もかもは、いつかは終わる。
それがどのような形で降りかかるのか、今はまだ誰も知らない。

1話 『予兆』 ③

時間は前後して——四月二十三日、日曜日。

時空管理局本局A4区画。

デスクワークに勤んでいたクロノは、そのコール音で一旦手を止めた。

いつしか眼前に浮かび上がっている空間モニターにタッチし、音声受信を許可する。

「こちら総務部、クロノ・ハラオウンだ」

「クロノ執務官、ライン110より通信が入っています」

「分かった。通してくれ」

一度空間モニターが閉じ、再び今度はもう一回り大きいそれが出現する。今度は画面に見知った人物が映っており、クロノは少し肩の力を抜いた。

「セシルか。何の用事だ？」

短髪の健康そうな顔立ちのその男の名は、セシル・マクミラン。役職は執務官兼古代遺物管理部機動二課課長。歳はクロノより五歳年上の十九歳。とは言え士官学校からの旧友であり、エイミイと同じくクロノが気兼ねなく話せる数少ない一人だ。

セシルは堅苦しいクロノの言葉に、やれやれと肩を竦めるモーシヨンを見せる。

「おいおい連れないなあ。友人同士が顔を合わせたら、まずは軽く世間話って相場が決まってるだろ？」

「知らないよ。僕は今忙しいんだ」

「まあまあんなこと言わずに。……でさ？ どうなの？ 最近エイミイちゃんとの仲は」

「……切るぞ」

「あー……タンマストップ待て待て待て！ まったく相変わらず冗談が通じねえ奴だな。そんなんじやこの先上手くやってけねえぞ？」

「余計なお世話だ」

お節介を焼くセシルに、クロノは盛大に溜め息を吐く。こう見えて

セシルは敏腕執務官として局の中でも一目置かれている存在で、人望もこう見えて厚い。執務官試験も一発でパスしたこともあって、クロノも少なからず尊敬している。ただ一つ、この軟派な性格さえもう少し改善してくれば、もう言うこと無しなのだが……

昔からクロノを弟分のように可愛がってくれることに不快感は抱かないクロノだったが、このテンションには当分まだ慣れそうにはなかった。

「で？ 用件は何なんだ？」

「ああ、そうそう。ちよつと急なんだが、頼み事がある」

「……面倒事の間違いじゃないだろうな」

「まあそう言わずに——古代遺物探索部隊に同行する武装隊員を五人ほど派遣してほしい」

「？ 何でそれを僕に言う。そういった申請は運用部に頼むものじゃないのか？」

クロノが渋い顔を見せると、セシルは少し表情を引き締めて続けた。

「まあそうなんだが、出向する所がちよつと厄介でね……探索先の観測指定世界が第二種危険区域なんだ。君の知り合いにさ、確か腕の立つ新米魔導師がいただろう？ ぶつちやけた話そこまで重労働じゃないと思うし、現場に慣れるためにもいっちょよどうかなあ、と思ってみたんだが」

「……そういうことか」

管理局法で、第二種危険区域へ赴く際には出向する魔導師に、最低二人はA Aランク以上の魔導師をつけることが定められている。

セシルが言っているのは、もしかしなくてもものは達のことを示しているのだろう。

「正直緊急の時を除いて、運用部に頼んでもなかなか申請通んないんだよなあ。ましてやA Aランク以上の魔導師なんてすぐに捕まらなだろうし。大体ロストログア絡みなんだから緊急に決まってんだろうが。たたくこれだから縦割り組織はいけない」

「君もその内の一人だろうに……。て言うかそれが本音か。それで、

探索日はいつなんだ？」

「一応流動的に調整出来るが、早ければ早いほどいい。明日とか」

「明日か……」

スケジュールを確認すると、明日はなのはとフェイトは模擬戦の訓練が入っている。とは言え、その時間も三十分程度。ウォーミングアップと考えれば、そこまで支障とはならないだろう。

「ひとまず彼女らに連絡を取ってみる。返答が入り次第すぐに連絡する」

「オーケー、頼んだ。それじゃ——」

「あ、ちよつと待て。一つこちらからも訊ねたいことがある」

「ん？ 何だ？」

「指定観測世界の第二種危険区域と言ったな。……探索指定遺物について、何か情報はないのか？ 武装隊員を率いて調査することは、既に初動調査は終わってるんだろう？ そんな場所に赴くのなら、少しでも情報が欲しい。なのは達にも伝えれることは伝えとかないといけないしな」

セシルからの返答はすぐだった。

「——ない。と言うか、それを知る権限は俺達にはない」

「……どういうことだ？」

「俺にも分からん。実際この調査は委託でな、だがその依頼先が伏せられてるんだよ。俺だって部長に訊いたけど、適当にかわされちゃった。だから今のところ俺はそれに従うしかないって状況」

「……………」

不穏な何かを感じ、クロノは暫し思案する。指揮官レベルの人間にさえ詳しい情報が伏せられたままの任務など、不安を感じるなど言う方が無理な注文だ。それがロストログアに関するものならば、尚更である。

そうなると、任務を指揮しているトップは一体——

難しい顔をしているクロノを見て、セシルは嘆息しながら、

「まああんまり深く考えるのもアレかもしれないけどな。たまにこういう案件もあるもんだよ、管理局には。組織つてのはそういうもん

だ」

「まあ、な……」

「他に訊きたいことは？」

「いや、特にもうない。じゃあ後ほど」

通信が終わり、空間モニターが閉じられる。

……何かが引つかかる。セシルはそこまで気に留めてないようだったが、やはり何かがおかしい。かと言って、上層部からそう言われているのならば黙って従事するしかないのだが……

「はあ……やっぱり面倒事じゃないのか……？」

そう呟きつつ、クロノはまずなのはに連絡しようと、机に備え付けられた通信用の受話器型デバイスを手に取った。

くくくくくくくく

模擬戦が始まって五分三十秒。既に戦局は固定されつつあった。

ヴィータのシュワルベフリーゲンによつて繰り出される鉄球を高速飛翔で回避、加えて迎撃しつつ、なのはは一度距離を置いてヴィータと対峙する。

そこでなのはは、ヴィータの後方にふと目を遣った。まるで火花のように紫色と金色の魔力光が弾け、拮抗し合っている。向こうは向こうで白熱している様子だった。

「おいさつきから逃げてばっかじゃねーか！ 勝負しろ勝負！」

先程から中々遠距離に形勢を持ち込まれ、痺れを切らしたヴィータが怒鳴り声を上げる。

「別に逃げてない！ これでも頑張ってるの！」

そう言う通り、なのはは逃げていないわけではない。これでも間合いを計ろうと必死なのだが、近接の鬼であるヴィータはなかなかさうはさせてはくれない。一度体勢を崩したら最後、ラケーテンハンマーで吹っ飛ばされてしまうだろう。防御力には自信があるのはだが、あれを真っ向から受け切れるとは言い切れないのが本音だ。

だからと言って、このまま硬直状態にするつもりはない。そろそろ

アレを仕掛けるべく、なのははレイジングハートを握る手に一層力を込めた。

「そっちがその気なら、ぶっ潰すまでだッ！」

ヴィータが再び特攻をかましてくる。

反面なのはは落ち着いて、精神を研ぎ澄ませる。

「アクセル——」

なのはの周囲に魔法弾が瞬時に出現する。

その数、最大発射限界数の十二発。

誘導効果を付与した魔力弾を制御すべく、思考が焼き切れるほど集中する。

そして、カツと目を見開いた。

「シューターッ！」

目にも止まらぬ速さで、魔法弾がなのはの元から離れる。

発射されたアクセルシューターは、予測不能な軌道を取りながらもヴィータへと一気に迫る。

「こな——くそッ！」

ほぼ反射的にヴィータはフィールド出力を上昇。そのままスピードを緩めず突っ込んだ。

四方八方から誘導弾がヴィータへと着弾する。爆発が起き、ヴィータの姿がたちまち猛煙に包まれる。

だがそれも束の間。ヴィータはラケーテンフォルムと化したグラーフアイゼンを構え、煙の中から彗星のように飛び出してきた。不安定な体勢になりながらも、ダメージはほぼなく、グラーフアイゼンも健在である。

「——ッ！」

と、次の瞬間、目の前の光景にヴィータは瞠目する。

既になのははレイジングハートの標準をヴィータへと向けていた。その形態はバスターモード。先端部分からは、ほぼチャージ済みの魔力が唸りを上げていた。

なのははヴィータの姿を再確認すると同時に、トリガーにかけた指を一気に引いた。

「バスターーッ！」

極太の魔力砲撃が、容赦なく放たれる。

しかし、ヴィータが不意に、不敵な笑みを浮かべた。

「へっ！ その程度お見通しだったのー！」

その軌道は分かっていたと言わんばかりに、ヴィータが体勢を崩したまま一気に急降下する。標的を失い、虚しく空を翔けるデバインバスターの真下へと、ヴィータは潜り込む形で回避した。

「なっ!？」

今度はなのの方が、驚愕に目を見開く番だった。デバインバスターの稼働中は、自分自身は基本的に動けない。故の固定砲台。今からバスターをキャンセルして回避行動を取ろうとするのはだったが、あつという間に下方からヴィータが急上昇してくるのが見えた。間に合わない。恐らく急場凌ぎの結界程度じゃ、ラケーテンハンマーを防げやしないだろう。

焦りの表情を貼りつかせるのはに、更にブーストをかけたグラーフアイゼンが迫る――

「レイジングハート！」

唐突になのが叫んだ。その不可解な行動に、ヴィータが眉を顰める。

異変はすぐに察知出来た。

先程全弾受け切ったと思われたアクセルシューターだったが、一発だけなのは後方に待機状態となっていた。その瞬間ヴィータは悟る。恐らく先程のは全て囷。そしてデバインバスターも囷。全てはこの不意打ちのための布石……

「クソッ！」

回避しようとヴィータは滑空の軌道を変えようとするが、どこに逃げるかを考えている内に手詰まりになる。さっきの予測した上での回避行動とは、わけが違う。

「――シューターッ！」

号砲。

なのはの声に呼応するように、レイジングハートに操作を任せた

シューターが発射する。

この一撃にまでコントロールの制御が及ばなかったのはだが、こっちはこっちでレイジングハートに全てを委ねている。最後の締めをデバイスに任せるといふ、一般常識からしたら賭けのようなものだが、なのははそうは思わない。

なのははレイジングハートを信頼している。ただそれだけのこと。だから何も憂うことなんてないのだ。

——その筈だった。

「……………へ？」

間の抜けた声を漏らしたのは、なのはとヴィータ、二人共だった。計算上は間違いなかった。ラケーテンハンマーが届くよりも前に、アクセルシューターがヴィータを急襲する筈だった。

だが結果として、シューターはヴィータの側を掠めるようにして遙か後方へ飛んで行ってしまった。

それを意味するのは、レイジングハートの失策。本来なら、あり得ない筈の軌道演算ミス。誤差にしてほんの数センチ。しかし、その数センチは勝負の結果を明白に左右する、あまりに遠い距離だ。

なのはは瞬時の内に茫然とする。今までレイジングハートに魔法の制御を任せて、こんなことは一度たりともなかったというのに……まさかの展開に混乱するなのは。ハッと気付いた時には、ヴィータが振り下ろしたグラーフアイゼンが、すぐそこにまで接近していた。

「食らえええっ！」

「——きゃあっ！」

中途半端な防御結界を展開するも、その程度ではヴィータは止められない。

パライツ！ とガラスが割れたような甲高い音と共に、結界が破られる。

なのはは思いつきり後方に吹っ飛ばされ、そのまま滑落した。

勝負は決した。しかし、両者ともどうも煮え切らない思いを抱えたままの決着だった。

~~~~~

「なのは、いる？　——って、まだ着替えてなかったの？　もうそろそろ出ないと、間に合わないよ？」

先に飲み物を買いにシャワールームの更衣室を出たフェイトが戻ってくると、なのははまだバリアジャケット姿で部屋の中央の長椅子に座っていた。

フェイトの入室に気付き、なのはは顔を上げる。

「あ、フェイトちゃん……うん、すぐ行く。ちよつと外で待っていてくれる？」

「う、うん……」

どこか表情に影が落ちているなのはに、フェイトは少し心配そうな目を向ける。

「えっと、大丈夫？　なのは。もしかして、さっきの模擬戦で怪我とかしたの？　なんかヴィータのラケーテンをまともに食らっちゃったとか聞いたけど……」

「へ？　ああ、そのことなら大丈夫大丈夫。特に診てもらうほど怪我はないよ？」

「そう、なの？」

「そうなの。だから心配しなくていいの。ほら、行った行った」

体よくフェイトを追い出し、なのはは再び椅子へ腰を下ろした。

そして、今まで握っていた手を開き、掌の上のスタンバイモードのレイジングハートへと話しかけた。

「——じゃあ、もう機能は正常なの？」

《Yes. I'm sorry for causing you

worry. (はい。心配を掛けて申し訳ないです)》  
「うん……でも、あの時何が起こったのか、よく分かってないんだよね？」

数秒の沈黙の後、レイジングハートは答えた。

《…Yes. But I'd say, I felt like



someone had interfered with me. (……はい。ですが、強いて言うなら、何者かが私に干渉してきたように感じました)》

「干渉……？ どういう、意味？」

《It was a feeling like Someone was controlling me. (誰かが私をコントロールしていたような、そんな感じですよ)》  
「……………」

発言の意味がすぐに理解出来ず、なのはは怪訝な表情を浮かべる。とすると、その何者かがレイジングハートに何らかの遠隔操作系の魔法をかけ、意図的にデバイスのOSを乗っ取ろうとしたということだろうか。

だが仮説は出来るものの、現実問題としてはまずあり得ないと言える。そもそもここは管理局内であり、そのような違法な魔法を使う人間などまず存在しないだろう。その上、訓練室にはユーノの強固な防御結界がされており、これを突破するとなるとまずユーノ自身が異変に気付く。最後にレイジングハートも、自らの機能の一つとして嚴重なファイアウォールを備えている。

以上のことを考慮すると、AIやシステムに影響するレベルの魔法の影響など受けない筈……なのだが……

「……今は、何も感じない？」

《Yes. That is absolutely fine.

(はい。問題ありません)》

「うーん……」

なのはが顔を上げ、時計を見る。シャワーを浴びる時間も考えると、そろそろ本気で集合時刻に遅れそうな頃合いだ。

本来なら技術部へとメンテナンスに行った方がいいのだろうが、土壇場で人員に穴を開けてしまうことに対して、なのはは気が引けた。(レイジングハートもこう言ってるし、それに任務は戦闘になる確率は低いつてクロノ君は言ってたし……)

少し考え、なのははレイジングハートに語りかける。

「……もし次ちよつとでも変に感じたら、すぐに言つてね？」

《Absolutely. (もちろんです)》

ハツキリとしたレイジングハートの返事を聞き、安堵を取り戻すのは。

ともあれ今は目先の仕事だ。これ以上フエイトを心配させる前に、なのはは気持ちを切り替えて立ち上がった。

くくくくくくくく

く 時空管理局本局・中央センター、第三応接室く

はやてはレテイから聞かされた一連の命令を受け、暫く声を出すことすら出来なかった。

内容は理解出来た。だが、そうする意味が全く分からない。

考えても考えても、納得するどころか疑念は更に膨れるばかりだった。

「……………それは、どういうことですか？」

ようやく絞り出したその言葉に、レテイはいつになく厳しい表情を崩さない。

「今報告した通りです。質問は受け付けません。先に言ったように、これは極秘任務です。ヴォルケンリッターを除き、他言は許されません。もし他者への情報漏れが発覚した場合、処罰の対象になるので、彼らにもよく聞かせておくようにして下さい」

「……………納得出来ません。その指令に対する、意義と目的の説明を要求します」

はやても負けじと食い下がる。こんなこと、詳しい説明もなしに、はいそうですか、と納得出来るわけがない。

そもそも何もかもおかしい。何故それを私に言うのだろうか。本人に直接言えいいことを、どうして私に…………？

あまりに判断材料が少なすぎて、はやてはとにかくレテイへ詰め寄ることしか出来ない。

だがレテイは事務的な口調で、はっきり言い放つ。

「それを知る権利は、今の貴女にはありません」

「そんな……っ」

頑ななレティの態度に、はやては思わず口を噤む。ここまで問答無用だと、首を縦に振ることなんて出来そうにない。確かに組織の中にいればそういう理不尽もあることははやても知ってはいたが、実際自分の身に降りかかると話は別だった。

すると、レティは幾分か表情を和らげる。眼鏡の奥の眼光が少し弱まった。

「……はやてさん。勘違いしないで欲しいのだけれど、これは貴女に『敵』になれと言っているわけではないの。寧ろ、時として救うことになり得るわ。貴女だって、何も分からないまま目の前であの子達が傷付くのを見たくないでしょう?」

「だからって、そんな皆を裏切るようなこと……」

「その表現は間違っているわね。そもそもこの事案には第三者の介入が必須なの。恐らく当事者に伝えても、土壇場で冷静に事を対処出来る可能性は限りなく零に近いでしょうね。もし貴女が同じ立場なら、そう思うでしょう?」

「っ……そんなこと——」

「分からない、と? 確かに信頼することは大切ね。だけど、全てをそれで片付けることは出来ないわ。……それを、理解してくれるかしら?」

「……………」

聡明なはやては、言葉に出さずとも確かに理解した。その現実を受け入れることが出来るかどうかは別として。

それは十一歳の少女が請け負うには、あまりに酷な責任だった。

しかし、これ以上有無を言わせないレティの態度を見て、はやてはぐつと唇を噛んだ。

まさかたった一人で決断することが、これほどまで辛いことだとは。はやては改めて、今まで当たり前前のように意思疎通してくれてきたヴォルケンリッターが、自分を支えていてくれたのだと気付かされた。

「今日ここに貴女だけを呼び出したのは、そういうわけよ。恐らく私から彼らに直接話したところで、紛糾するのは目に見えているし。……これは彼らの指揮官としての貴女に対する任務とも言えるわ」その言葉を聞き、はやてはポツリと呟く。

「私を……試そうとしてるんですか？」

「……そう言われても仕方ないかもしれないわね。だけど、これから絶対に必要となってくる資質よ。私は、貴女だから出来ると思って呼び出したの。そうでなければ、最初から交渉の余地はなかったわ」

「もし私が、ここで嫌だと言うたら……？」

「……その時はその時よ。だけど、そうする気もないんでしょう？」

「……………」

「本当ならもつと穏便に事を図りたかったのだけれど、事態がそうしてくれないわ。本当はもつと荒事に持ち込む案も出たのだけれど、これが最大の譲歩策として何とか通すことが出来たの。だから——よろしく頼むわよ」

レティは先に席を立ち、はやての返事を待たずして退出した。残されたはやては、暫く座ったままの体勢でじつとしていた。

そして深く、深く、息を吐く。

「……どうしたらええんやろ、ほんまに……」

誰にともなく漏らした言葉は、そのまま虚空へと溶けていく。

自分に突きつけられた、この身に余る程の責任ある任務。

レティはああ言っていたが、果たして自分もそれに直面した時、冷静に対処することが出来るのだろうか……

と言うよりかそれ自体よりも、もつと大前提のことに考えを巡らせたはやては、今一度眉を顰めることとなった。

「管理局で、何かが起こってる……？」

大きな何かが、知らない所で動いている。

漠然としながらも、心のどこかで確実性を感じるはやてだった。

# 1話 『予兆』 ④

その世界は、岩肌が剥き出しになった峡谷が延々と広がっていた。場所は第121観測指定世界『オリアス』。前述した通りの環境だが、これでも点在するオアシスのような場所を拠点として人が住んでいるらしい。

だが場所によっては魔力のバランスが不安定であり、魔力持ちの人間が立ち入ると体調を崩すばかりか、魔力暴走の引き金にさえなってしまうかねないと言う。それ故の、第二種危険区域である。

とは言うものの……

「特に私達、すること無いっぽいねー」

「うん。言ってしまうえば、有事の時のバックアップみたいなものだから。私達は」

高台に設置されたベースキャンプにて、なのはとフェイトは眼下に広がる発掘現場を眺めていた。

到着してから早一時間。作業は順調に行われているようである。

ロストロギアの発掘調査に同伴するのは二人共始めてではないのだが、今まで戦闘状態に入るようなことは一度もなかった。そして今回もどうやらその様子ようだ。ともあれ現時点でこれと言ってトラブルは発生せず、なのはとフェイトは暇を持て余していた。

「でも、やっぱりロストロギアの発掘だし、何が起こるか分からないから……」

「うん。いつでも出撃出来るようにはしとかなないとね。……そう言えばフェイトちゃん」

「? 何? なのは」

「そのロストロギアについてだけど、何か聞いている?」

「いや、特には……そう言えばブリーフィングの時、そのことについて説明なかったね……」

ロストロギア関連の事案では、そのロストロギアの現時点で分かり得る情報を関係者の間に共有しなければならぬ。情報共有はあらゆるケースで重要ではあるが、特にロストロギア絡みは注意を払うべ

きである。何しろ相手は基本的に正体不明の遺物であり、現場にいる人間の間で情報の齟齬があれば、場合によっては取り返しのつかないことになってしまうからだ。

だが、今回それがなかった。ただ単に、遺物管理課のサポートをしろとしか言われていない。

とは言え本来下っ端なのはやフェイトにとって、そこまで気に揉むようなことではないのは自覚していた。

それでも、何かが引つかかる。言葉には出来ないけれど、何かが変だ。

最初に気付いたなのはに続き、フェイトも何だか胸の中に言いも知れぬ蟠りを感じ始めた。

「……………」

何となく不穏な空気が二人の間に漂い始める。

すると、アクセルモードにあつたレイジングハートが、突如として煌めきを見せた。

《Sensing a huge magical power.

It approaches at high speed. (巨大

な魔力を感知。急速に接近中です)》

「っ!？」

なのはとフェイトの間に緊張が走る。フェイトもすぐ様アサルトフォームのバルディッシュに、逼迫した声で呼びかける。

「バルディッシュー!」

《:Until the arrival of the target, 300yard::280yard::260yard::(対象の到着まで、300ヤード……:280ヤード……:260ヤード……)》

速い。この調子だと、あと十数秒でやって来てしまう。

この後誰かが合流するなんてことは聞いていない。それに、なのはは既に感じ取っていた。

こんなにも敵意ある魔力を掲げた誰かが、味方な筈がない。

「……………」

なのはとフェイトがそれぞれの愛機を構え、飛来する魔力反応の方

角へと向いて戦闘態勢を取る。

何かが、接近している。ここからだど豆粒のようにしか見えないが、なのはは確かにそれを視界に収めた。

それとほぼ同時だった。

接近してくる何者かが、一瞬光った。

と思ったのも束の間、一秒後には直径数メートルはあろうかという魔力弾が向こうから撃ち出されたことが分かり、二人は驚愕に目を見開く。

「なっ——ッ!？」

標的は、明らかにこの発掘現場地点だった。

ここでようやく調査隊のメンバーも異変に気付き始めた。だが、あまりに唐突且つ強大な脅威に、彼らには為す術はないようだった。

なのはとフェイトは余裕で避けられる猶予があつたが、もしそうすれば背後の調査隊の人間が直撃を受けてしまう。となれば、取る方法は一つしかない。

「調査隊の皆さん！ 今すぐ私達の後ろに逃げて下さい！ 早く！

——フェイトちゃんっ！」

「うんっ——はあああああっ！」

フェイトが左手を掲げ、幾多の魔法陣——ラウンドシールドを形成する。

防御に長けたなのはは、より周囲への被害を減らすためにフェイトより前に出て、レイジングハートを力強く握った。

「レイジングハート、お願い！」

なのはの声に応じ、レイジングハートがカートリッジロードのモーションに入る。重々しい音と共に葉莖が二発排出、瞬間的に魔力の急上昇が計られる。

《Wide Area Protection》

なのはを中心として巨大な魔法陣が出現する。そして、薄い桜色をしたドーム型のフィールドが瞬く間に組み立てられた。

だが、それも殆どギリギリの出来事。

二人の防御魔法が完成するや否や、正体不明の誰かから放たれた魔

力弾が着弾した。

「っ!? く、う……ッ!」

思った以上の強烈な一撃が、なのはを襲う。体全体が揺さぶられるほどの衝撃に、なのはは思わずよろめてしまう。それでも歯を食いしばり、数ミリ地面にめり込む足に必死に力を入れる。

まるで暴風と地震が一気に来たような感覚が続くこと約十秒、何とか耐えきったなのははすぐにフェイトへと向き直った。

「大丈夫!? フェイトちゃん!」

疲弊した様子ながらも、フェイトは何とか気丈に返事をする。

「うん、私は平気——なのは! あれ!」

フェイトが指し示す方向へと、なのはは顔を上げる。

そこには一人の若い男が、上空でなのはとフェイトを見下ろしていた。

「……………」

銀色の髪を靡かせるその男の顔は、やはり二人共見知ったものではなかった。

地上を睥睨する鋭い目つきは、さながら獲物を前にした鷹。その眼光を受けて、なのはは冷や汗が頬を一筋伝うのを感じた。

黒いマントを羽織った男の右手には、穂が三叉に分かれた全長二メートルほどの槍——トライデントが握られていた。だが、ただの槍ではない。遠目から見ても分かるように、それはアームドデバイスだった。

改めて目の前にして、男の魔力が尋常ではないことに、なのはは緊張を隠せない。だがこのまま吞まれては、元も子もない。

なのはは決意し、フェイトへと顔を向ける。すると、彼女も同じ気持ちだったのか、示し合わせたように二人は顔を合わすこととなった。

「……行くよ」

「分かった」

頷き合う二人は、一斉に飛翔した。そして謎の男の前に立ちはだかった。



そこで、ようやく男が口を開いた。

「……ああん？ 誰だテメエら。ガキが出しやばってんじゃねえぞ。どけ」

底冷えするような声に怯みそうになりつつも、なのはは毅然とした態度で言い放つ。

「ここは……管理局の管轄下にある、古代遺物探索現場です。先程の貴方の行為は明らかな妨害及び危険行為で——」

そこまで言った時だった。

男は槍の穂先を二人へ向けたかと思えば、問答無用で魔力弾を撃ち出してきた。

「きゃつ——」

二人が反応する前に、なのはがレイジングハートを介してオートモードに設定していたプロテクションが作動。難なく攻撃を弾いたのはを見て、男は僅かに眉を動かす。

「はっ……ただのザコじゃあ、ねえみたいだな」

「いつ、いきなり何を——っ！」

「うるせえ。こつちも無駄にドンパチやりてえわけじゃねえんだ。——サイケロッドはどこだ。ここから反応があったんだから、テメエらが隠してんのは丸分かりなんだよ。とつとと出せ。でないと殺す」

無慈悲に言い放つ男の物騒な言葉に、なのはとフェイトは緊張した面持ちで唾を飲み込む。

《——Confirmed evident hostility.

Judged he is danger. (明らかな敵意を確認。危険人物と判断)》

「うん、バルディッシュ。——誰かは知りませんが、交渉の余地なしと判断して、貴方を逮捕します」

《Haken Form》

バルディッシュの先端から金色の魔力刃が出現、戦闘態勢に入るフェイト。なのはも覚悟を決めて、レイジングハートを構え直す。

だが男は当然のように投降する様子は微塵も見せない。それどころか、目を細めて興味深そうになのはとフェイトを凝視してきた。

——否、正確には、レイジングハートとバルディッシュを。

「ほう……お前らそれ、インテリジェントデバイスか。なら、どちらにせよ戦う理由が出来た」

男の眼光が一層鋭くなる。そして獰猛な笑みを浮かべたのと同じ時、男が二人へと突っ込んできた。

「っ！」

なのはとフェイトは互いに別方向へと散開。果たして、男はなのはの方へと追撃してきた。

「——疾ッ！」

目にも止まらぬ速さで、男が瞬きの内に十数もの槍による突撃を繰り出してくる。ただの突きではない。切っ先に魔力を付与した、一突き一突きが必殺の攻撃。並のラウンドシールドなら、殆ど紙切れ同然と言つていいだろう。

なのはは瞬時に防御よりも回避を判断。アクセルフィンに魔力を集中させ、一気に飛翔。

男の頭上に急上昇しつつ、なのはは体を捻って男の方向へとレイジングハートを構える。タイムラグ無しでレイジングハートの先端には環状魔法陣が渦巻き、魔力が恙無くチャージされていた。

そしてなのはが決め打ちの直射砲撃魔法の名を紡ごうとした——  
が、

「なっ?！」

ほぼ手の届くところに、十メートルは距離を取った筈の男の姿があった。

予想以上の速さで肉薄してきた男を前にして、なのはは一瞬息が止まる。

ほぼ瞬間移動と言つても良いレベルのスピードだ。機動力が凄まじいフェイトと何度も戦闘訓練を繰り返してきたなのはとしては、ちよつとやそつとの素早い相手ならば十分に対応出来ると自負していた。しかし、これは完全に規格外であった。

「Master！」

レイジングハートが呼びかけるが、驚愕と動揺によつてなのはの判

断が遅れる。

男は何の躊躇もなく、再び魔力を漲らせた槍を繰り出す——ッ

《Plasma Lancer》

途端、なのはと男の間に、雷の軌跡が煌めいた。あわや槍の切っ先がなのはに届こうかというギリギリのところ、再び両者の間合いが開かれる。

それだけでは終わらない。死神の鎌のように、鋭利な金色の光刃を振りかざしたフェイトが男目がけて突進してきた。

「はあああああつー！」

《Haken Saber》

体全体を使って、フェイトはバルデイツシュを一振り。そこから出現した円形状のハーケンセイバーが、まるで巨大なチャクラムのように回転しながら男へと目がけて滑空していく。

「うぜえんだよー！」

吼えながら、男が槍を大きく薙ぐ。男の迎撃によりセイバーは爆発四散、光の粒子と爆煙が弾ける。

するとすぐに煙の中からは飛び出していったのを見て、フェイトはほつと胸を撫で下ろす。だが、すぐに殺気を感じたフェイトはバルデイツシュを持つ手に力を込める。

その感覚は当たっていた。朦々とした雲煙から、突如として槍型の魔力弾がフェイトに向かって飛んできた。ただの射撃魔法ではない。小刻みな軌道を描くそれを見て、誘導効果が付与されているとフェイトはすぐに悟る。

高速機動を駆使し、逆に誘導弾を誘導してフェイトは各個撃破する。

最後の誘導弾を斬り伏せたところで、本番がやってきた。

「オラアッー！」

それはまるで弾丸。或いは小さな台風。大気を渦巻かせながら、男が切っ先に魔法陣を展開させた槍を構え、フェイトへと突撃してきた。

フェイトは一秒、逡巡する。そしてすぐに迎撃態勢に入った。

「バルドイツシュ！」

《H a k e n S l a s h》

リボルバーが僅かに回り、排莖。魔力が溢れ出るのを感じつつ、フェイトは真つ向から男の攻撃に対して、更なる力を以て振り伏せる

——ツ

「ツツ！」  
互いのデバイスがぶつかり、鏝迫り合いの状態になる。想像以上の衝撃に腕の感覚に違和感を覚えるフェイトだったが、それでも何とか必死に耐える。すると、反面余裕の表情を浮かべている男の口が動いた。

「——いいねえ。ザゴどころか、ただの魔導師じゃあねえ。ますますブチ殺し甲斐が出てきたじゃねえか、ああ？」

「つ……貴方は……一体……」

「お前が知る必要はねえよ。俺らはただインテリジェントデバイスを——ツ!?」

男の発言が不自然に途切れる。フェイトはすぐにその原因が分かった。男の四肢が、それぞれレストリクトロックによって拘束されている。

その魔力光は、桜色。

「フェイトちゃん！ 離れて！」

上空から声がかかる。瞬間、何が起ころうとしているのか察知したフェイトは、脱兎のごとくその場を退いた。

「クソがツ！」

男が悪態を吐きながら、バインドを解こうと手足に魔力を注ぐ。だが、頭上に眩い光を感じ、はたと天を仰いだ。

そこには、先程自分が放った魔力弾とは比較にならぬほどの光球が、こうしている間も更に肥大化していた。

《C h a r g e c o m p l e t i o n . (チャージ完了)》

レイジングハートが、静かに準備の終わりを告げる。

なのはは呼応するように、抑えつけていた魔力を一気に解き放つ。

——その時だった。

「っ……!?!」

いきなりだった。何の前触れもなく、レイジングハートから不自然に規格外の魔力が溢れ出た。

(なっ、何!?! 何何!?!)

まるで跳ね上がるような魔力の横溢に、動揺しながらもものは必死で制御する。

しかし、すぐになのははこれ以上自分の手に負えないと判断する。と言うか、あり得ない魔力量だ。自分の魔力総量とレイジングハートに装着してるカートリッジを全弾使っても、ここまでの魔力は出ないだろう。だが、それほどの魔力が今確かにレイジングハートから溢れ出ているのだ。

理解不能だった。だが、この状況で詳しく考えている暇などなかった。

これ以上は、暴発してしまう。なのはは判断し、危険を承知で砲撃準備の最終調整に入る。

レイジングハートの先端に、一層魔力が集まる。そして――

「スターライト――ブレイカーツ!!」

どうと桜色の魔力の奔流が空を翔ける。

それはまるで壁。逃げ切れる隙間など、皆無。

極太の砲撃魔法を前に、男は瞬時に防御魔法の魔法陣を展開。しかし、すぐにシールドは砕け散り、彼はブレイカーに完全に吞まれた。

ブレイカーはそのまま地上へと着弾。衝撃の余波で、嵐のような砂塵が一気に充満した。

「……ふう……」

なのはが大きく息を吐き、レイジングハートも排気ダクトから気体となった魔力残滓を噴き上げる。

よく分からないままブレイカーを撃ち出し、なのはが肩で息をしていると、大きく旋回してきたフェイトが合流した。

「なのは」

「フェイトちゃん。怪我はなかった?」

「うん。ちよつとバルディッシュにダメージがいつちやつたかもだけ

ど……なののはは？」

「私は平気……だけどあの人は……」

二人共視線を同じくして、土煙が充満している地上を固唾を飲んで見守る。

目視した分には、確実に直撃だった。手応えも感得した。少なくとも無傷では済むまい。魔力を削り取られ、昏倒している可能性も十分に有り得る。

だが、なののははこの静けさがどうも不気味に感じられた。

「……………」

煙が、晴れる。

数メートルはあろうかというクレーターが、煙の中から徐々に顕わになる。

その中心には――

「……………テムエら……………」

さつきよりも数段表情を険しくさせた男が、なのとはとフェイトを見上げていた。

魔力が減少しているようにまるで見えない。寧ろ、肌が焼けるような烈火の如き魔力を、二人は確かに感じていた。

「無傷……………」

動揺を隠せないフェイトに、なののはは落ち着き払った口調で分析する。

「ううん、全然ダメージが通ってないわけじゃない筈。その証拠に、あの人の魔力の波動に結構ブレがある。無理矢理魔力を捻り出してるんだと思う」

「なら……………もう一撃」

「うん。何とかして、隙を作り出す」

正直なところ、二度に渡るレイジングハートの謎の不調に、なののは戦闘を長引かせたくない思いがあった。

だが状況はそうさせてくれそうにない。不安定でありながらも、とにかくこの場を切り抜ける方法を必死で模索するのはだった。

「……………」

なのはとフェイトも、男の一挙手一投足を見逃すまいと強い眼差しを向ける。

男もまた、殺気立った視線を二人へと飛ばす。

息が詰まるような、張り詰めた空気が流れる。

何秒経つただろうか。

果たして先に動いたのは、男の方だった。

勢いよく飛び上がった男は、そのまま二人に背を向けて地平線の向こうへ消えていってしまった。

「っ！………え？」

「あ、あれ？」

ぐつと身構えていたなのはとフェイトは、その予想外の行動に呆気に取られる。

逃げた、のだろうか。それにしても、男の挙動から推測するに不自然に思われた。もしかすると、こっちからは分からないだけで結構負傷していたのだろうか。

本当に男がどこかへ行ってしまったのを確認したなのは、フェイトに向き合う。

「えっと………とりあえず降りよっか」

「うん。……調査隊の人の安否確認もしないといけないし」

「そうだね。じゃあ、私向こうの方行つてくるから」

「分かった。また後で」

そう言い、なのはは発掘現場へ、フェイトはベースキャンプの方へと移動した。

「皆さん！ 大丈夫でしたか!？」

なのはが降り立つと、現場の人達は一様に安堵した表情を見せた。

「……あの変な奴は、もうどっか行つたのか？」

「はい。何とか……途中で逃げられちゃったんですけど、もう大丈夫だと思います」

「そうか……済まなかったな、助けてもらって……」

「いえ、それが私達のお仕事ですから——つて、それは……？」

調査隊の一人が手に持っているそれに、なのはは自然と注目した。それは水晶型のスフィア——恐らく簡易結界だろう——であり、その中には小さな宝石のような球体が保管されていた。

その色は、綺麗な海を思わせる透き通った蒼。自ら発光しているように、その美しさが一層際立って見えた。

なのはがまじまじとそれを眺めていると、調査隊の男性から声がかかった。

「先程発掘に成功したロストロギアだ。触れない方がいいぞ。内部からはかなりの魔力値が計測されてる。ふとした弾みで暴走する可能性すらあるから、慎重に管理局へ運ぼうとした矢先、あの男の襲撃だ。本当に助かったよ」

「は、はい……どうも……」

調査隊から感謝されるのはだが、何故だかそのロストロギアからなかなか目を離すことが出来なかった。

単に綺麗だからというわけではない。それ以上に、何となく察することが出来たのだ。まだ正体も分からないこのロストロギアが、どういったものであるのか。

(何だろう……この感じ……)

この感覚を、なのはは確かに知っていた。

だが、それがどういった意味を持つのか、すぐには理解出来ない。理解出来そうにない。

それでも、現実目の前に静かに鎮座している。

「……………」

なのはの身体の奥で、何かドクンと鼓動を打った。

胸がざわめく感じがする。なのはは今一度眉を顰めて目の前のロストロギアを凝視した。

と、そこでののはは微かに目を見開いた。

何故なら、そのロストロギアは——

「……………あつ」

と、そうこうしている内に、管理局の救助隊が到着したようだった。



手際良く負傷した隊員を手当てし、撤収作業を始める。

ロストログアも、あつという間に局員の名も知らぬ誰かによって回収されてしまった。

なのはは、暫くの間その場に立ち尽くしていた。

自分でもどうしてそう思ったのか分からない。だが、そう感じてしまったのだから仕方がない。そしてそれは、時間が経つにつれてじわじわとなのはの心を支配していった。

さつき発掘されたというロストログア。恐らく襲撃者が狙っていたと思われるロストログア。

なのはは、心の中でぼつりと呟いた。

(似てる……初めて会った時の、レイジングハートと……)

物語は、静かに動き始める。

## 2話 『襲撃』 ①

翌日。

「なーのーはっ」

「——あいたっ!?!」

頬杖を立ててぼんやりしていたなのは、唐突に額に軽い衝撃を感じて我に返った。

同時に、教室の喧騒が一気に鼓膜を震わせる。そんなことも分からないくらい、どうやら本当にボーっとしてしまっていたようだ。

黒板の上の掛け時計を見ると、時刻は十一時三十五分。三時間目の休み時間の真っただ中だ。

なのは少し涙目になりながら、額をさする。すると、机を挟んで仁王立ちしていたアリサが、呆れた表情でなのはの顔を覗き込んだ。き

「ちよつとどうしたの？ 朝からずーつと上の空で。何か変な物でも食べた？」

「ふえ？ いや、別にそういうんじゃない……」

「にしては、ちよつと気が抜けすぎてない？ さっきの算数の時間も、最初自分が当てられてること気付かなかったでしょ」

「あう……」

アリサに指摘され、ますます小さくなるなのは。と言うかやらかしたのはそれだけではない。一時間目の国語の時間には音読を合計四回もトチるし、二時間目の体育の時間ではドッジボールで見事に顔面に直撃を食らってしまった。誰がどう見ても、不調と言わざるを得ないなのはの状態であった。

すると、横からずかの声がかかった。

「何か困ったことがあるんなら、私達相談に乗るよ？ もしなのはちゃんがよければ、色々頼ってほしいな。何だか今のなのはちゃん、ちよつと辛そうだし……」

「ずるかちゃん……」

「そうそう。私らに言って楽になっちゃいなさいな。——って言う

か、フェイトは何か知らないの？」

「えっ？ わ、私？」

話の矛先を向けられ、なのはの右斜め後ろの席のフェイトが素っ頓狂な声を上げる。

「そうよ。昨日なのはと放課後ずっと一緒にいたんでしょ？ だから知ってるのかなって。なのはがこんなんになってる原因」

「あう、ちよつと、アリサちゃん、あうあう」

アリサがなのはの髪をわしゃわしゃと撫でる。

フェイトはおろおろしながら、少し歯切れ悪そうに答える。

「いや、まあ何も無かったって言うって嘘になるんだけど、ちよつと事情が事情で……」

「？ 煮え切らないわねえ。込み入った事情があるってのは何となく分かるけど」

「……もしかして、魔法関係のことで何かあったの？」

すずかのその鋭い一言に、フェイトがあからさまに動揺する。

アリサもすずかも魔法のことについて、かじる程度であるがそれなりに教えてもらっている。とは言え、二人は完全に一般人。なので、アリサとすずかにとって、なのは達がたまに会話で話題をはぐらかすようなことがあれば、経験上大体そっち関係の話題と結論付けるのにそう時間はいらなと言えた。

まあ今回においては完全に凶星なのだが。

「あーえーそうなんだけど……なのは？」

「……うん。私から言うよ。ゴメンね、二人共。心配かけちゃって」

なのはがどこか吹っ切れた感じで、アリサとすずかに申し訳なき気に微笑む。

そして一連の事情を簡潔に説明した。

レイジングハートの様子がどこかおかしく、昨日の夜から技術部に預けていること。

そもそもレイジングハート自身も無自覚の不調らしく、何が原因なのかさっぱり分からないこと。

今までにないパターンのアクシデントで、こうしている間も不安が

ぬぐい切れないこと。

かつてヴィータとグラーフアイゼンに敗れ、暫くの間レイジングハートを修理に出していた時もあったが、あの時とはまた事情が別だ。何度も言うが、原因が分からない不調ほど不安になることはない。

なのはの吐露を耳にし、まずアリサが溜め息を漏らした。

「そういうわけね……でも今アンタがいくら悩んだりうじうじしたりしても、何も解決しないでしょ？　寧ろ周りの人間まで気が滅入っちゃうわ」

「……………」

「ア、アリサ、ちよつと言い過ぎじゃ……」

「別になのはをいじめてるわけじゃないわよ。私はただ、そのレイジングハートさんの気持ちにもなって考えたらどうなの、って思ってるの。待たされる側も、そりゃ心配してくれるにこしたことはないけど、ちよつとは信じて待ってほしい、とも思ってるんじゃない？　もし反対の立場なら、なのはどう？」

厳しい言葉ながらも的確なアドバイスに、なのははどこか思うような表情を浮かべながらも、こくりと首肯した。

「そうだ。自分が信じてあげなくてどうする。レイジングハートを一番信じてやれて、分かってやれるのは、彼女のマスターである自分ではないのか？」

「私は……………」

ならば、待とう。悪い結果を思うくらいなら、良い結果を思おう。それが、今出来る彼女に対する一番の施しだと信じて。

そう考えたら、気が楽になってきた。強張っていた頬も、なんだか緩んできた感じがする。

「……なんか気持ちの整理つけたら、ちよつと楽になった、かも」

「ふふっ、いつものなのはの顔に戻ったわね」

「よかったー。私達に出来ることは少ないかもだけど、もし何かあったら協力してあげるから、いつでも言っってね」

「うん、ありがとう、アリサちゃん、すずかちゃん。……フェイトちゃ

んも、ゴメンね変に心配かけちゃって」

「そんな、気にしなくていいよ。なのはが元気になったんなら、私は何も気にすることないから」

「でも、今回はフェイトちゃんには何も言えないまま悩んじゃったから、変に思っちゃったでしょ？ 今度からはフェイトちゃんにもすぐ相談するからね」

「なのは……私も、同じようなことになったら、きつとそうする。ううん、絶対」

「フェイトちゃん……」

何やら二人の周りに近寄りがたいオーラを感じ、アリサは若干げんなりしつつその様を眺める。

「まーたイチャコラしてこの二人は……」

「ふふつ、いつもの雰囲気に戻っていいじゃない」

「なんかアンニユイな雰囲気の方がよかったかもしれないわね……ねえ、はやて。この二人って向こうでもいつつもこんな風なの？」

はやての席は、なのはの席の左斜め前。アリサが振り返ると、はやてもまた両手で頬杖をついて、特にどこを見ているわけでもなくボーっとしていた。

どうも上の空のようで、アリサが呼びかけたのにも関わらず反応がない。

「ってこっちもか……全く世話の焼ける……」

アリサはずんずんと勇み足ではやての眼前へと移動する。そして、

「はーやーてっ！」

アリサがはやての目の前で両手を叩くと、はやてのトロンとしていた両目が思いっきり開いた。

「わひゃっ!? ——ふえ!? な、ど、どないしたん……?」

「アンタもまた、魔法関係のことで悩み事？」

「へ? な、何が？」

「なのはが、レイジングハートの調子が悪いとかどうとかって、今日の朝から注意力散漫だったのよ。はやても何かあったの？」

「私? いや、今は単に普通にボーっとしてただけや。気に揉んでる

ことなんて、何もあらへんよ?」

あつさりとしたはやての口調に、アリサは少し訝しげに眉を顰める。

「本当に?」

「ほんまやて。もう、アリサちゃんは疑り深いなあ。私かて、ふと黄昏たくなる時もあるんやで?」

「……似合わないわね」

「なっ、酷いわあ……これでも守ってあげたくなる美少女を演出してるつもりやねんけど?」

「それを自分で言うか」

すっかりはやてのペースに乗せられ、漫談に興じるアリサ。

だが、そんな折、すずかは確かに『それ』を見た。

「……………」

はやての視線が、一瞬なのはとフェイトに向けられる。

憂いのこもったような、思いつめたような、その瞳。たまたま視線を向けた、とは言い難いはやての表情。

すずかはそれが何なのかを問い詰めようとして、やはり止めた。

何だかこの件には触れない方が良い気がしたから。

何故だかは分からない。だが少なくとも、自分達の手に負えるようなものではないと、直感的に悟ったのだ。

その違和感の正体をすずかが知ることになるのは、ずっとずっと後のお話。

くくくくくく

時空管理局本局、中央センター。そこに位置する、第一休憩室。

一見広々としたカフェを思わせる、洒落た内装の広間には大体四、五十人ほどの局員が午後のティータイムに興じたり、談笑したり、昼寝をしたりと各々羽を休めていた。

そんな休憩室の一角。四人掛けのテーブルに腰掛けている三人の

局員は、いずれも周囲の和やかな雰囲気とは裏腹に難しい顔をしていった。

クロノ、エイミィ、セシルの三人である。

「結局昨日のロストログアに関しては、そつちで保管してるわけじゃないのか？」

クロノの問い掛けに、セシルはコーヒーカップを傾けながらぶっきらぼうに答える。

「まあなーよく分からんけど、俺が把握した時には既に別部署に持つてかれてたよ。でも技術部の知り合いに訊いてみたら、そんなロストログア扱ってねーっつーんだよ。じゃあどこ行っただって話なんだが。担当課のトップは俺だったのに、どういうわけだ全く」

「……まあその辺りは僕は完全に管轄外だから何も言えないが、確かに少し気になるな。とは言え、藪蛇になりそうな気もするが」

「お偉いさん方の考えてることは分からん。ま、こういうのはこれっきりにしてほしいもんだ」

「でも、なのはちゃんとフェイトちゃんの二人が戦った魔導師って、まだ捕まってないんでしょ？」

エイミィの言葉に、セシルの表情が再び曇る。

「そうなんだよなあ……もう対策本部は立てられてるみたいだけど、どうもそつちも嫌な感じがするぜ。あの子達の話からするに、例のロストログアを狙ってるのは明白だ。野放しにしてりゃ、いずれまたどっかで同じようなパターンでぶつかるところだろうな」

「二人が言うには、かなりの強敵だったらしい。見たこともないデバイスを使い、なのはのスターライトブレイカーを受けてもほぼ無傷だったとも聞いた」

「それって……かなりヤバイ相手なんじゃ……？」

「真実なら、考えるまでもないだろうな」

何度かあの集束砲撃魔法の魔力データを観測してきたクロノやエイミィにとって、あれを受けて無傷だとは俄かには信じがかった。

それよりも、今のなのとはフェイトの二人を相手取って同等以上に立ち回れる魔導師など、この管理局内でも見つけるのは難しい。純粹

に考えて、魔導師ランクに置き変えるとSランクは堅いだろう。

セシルがティーカップを煽り、一息吐いたところでポツリと呟いた。

「……サイケロッド、だったか。正体不明の魔導師が言っていたよく分からん言葉は。クロノ、お前聞いたことあるか?」

クロノは「残念ながら」と首を横に振りつつ、

「知り合いに無限書庫の司書長がいるから、一応彼に片手間でもいいから調べてもらおうよう頼んでる。何か分かったら連絡を寄こすようにも言ってるよ」

「そうか……確かに無限書庫なら何か情報が埋もれてるかもしれない。お前結構顔広いな」

「彼とはただの腐れ縁だ。と言うか、既に向こうの方から依頼が回って来てるかもしれないけどな。……ともかく、可及的速やかな逮捕が望まれる。それに、ロストログア関連のいざごきは早目に解決してほしいもんだ」

過去の事件を振り返りつつ、クロノが嘆息する。

どちらも最終的には解決したものの、やはりクロノの中ではスッキリしない終わり方だったと今でもたまに思ってしまう。

あれだけ被害を最小限に抑え、傍から見ればこれ以上ない指揮官のあり方だっただろう。だが、それでもまだまだ未然にやれたことがあったのではないかと後悔してしまう。

こう思ってしまうことがまだ未熟なんだろう。クロノはそう自戒するも、そのようにふっ切るまで成長するにはまだまだ場数等が足りないのだろうか、とそう思ったりもするのだった。

するとセシルが意地悪そうな笑みを浮かべ。

「そうか。お前『PT事件』も『闇の書事件』も担当だったんだよな。はっ、もしかしたら今回も巡り巡ってややこしい話が舞い込んでくるかもしれないねえぜ?」

「やめてくれ。今回ばかりは本当に自分のことで手いっぱいなんだ……」

疲れた表情を見せるクロノに、ふとエイミイが心配そうに眉根を寄



せる。

「でも無理しちやダメだよ？ 最近本当に忙しそうなんだから」

「無理なんてしていない。自分の体調管理くらい自分でやってる」

「そんなこと言って、昨日だって、椅子に座りながら寝てたでしょ。ちゃんと休む時は休まないと、体壊すよ？」

「っ……大きなお世話だ」

「おいおいクロノ……未来の嫁さん困らすとは感心しないなあ」

セシルのその言葉に、クロノは丁度口に含んだコーヒーを吹き出しかけ、エイミイは目に見えて顔面が紅潮していった。

「なっ、ちよっ、セシルさん何言ってるんですか！」

「あれ？ 違ったの？ 俺あてつきり二人共その辺まで進展してると……」

「ち、違いますって！ クロノ君も何か言ってるよ！」

「照れてるんだって。察してあげろよ」

「……今すぐ口を氷漬けにされたいのか？」

クロノが半眼で凄みを利かせたところで、セシルは「冗談冗談」と笑って誤魔化する。

全く、どこまで冗談なのやら。こういうことを突拍子もなく言うってくるから油断ならない。それにエイミイもエイミイだ。顔を赤くするだけじゃなく何か言い返してくれないだろうか。このままではセシルの思う壺だ。——と、グチグチと心の中で呟きつつ、クロノは頭痛が増していくのを感じた。

セシルのせいでおかしな空気になってしまったのを何とかすべく、クロノは一度咳払いして話の筋を軌道修正した。

「そう言えば、なのはのレイジングハートが不調だったとか言っていたが——」

その時だった。

休憩室に流れていたピアノクラシックが不自然に途絶え、甲高い警報音が鳴り響いた。

「っ!？」

その場にいた全員が、弾かれたように天井に設置されているスピー

カーを凝視する。

アナウンスは、すぐに聞こえてきた。

「緊急事態。緊急事態。第5セクターにおいて、複数名の侵入者を確認。現在破壊行為を繰り返し、第6セクターへと移動中。武装局員は速やか装備を整え、第5セクターまで出動して下さい。繰り返します。第5セクターにおいて……」

さつきまでのまったりとしたムードから一転、騒然となる休憩室。

クロノ達も一気に目付きを変え、互いを見遣る。

「クロノ」

「ああ。僕達も行こう。エイミィは管制室で待機してくれ。万一の時を考えて、敵の捕捉を頼む」

「了解」

そして三人が立ち上がったところで、遠くで何かが爆発するような音が聞こえてきた。

同時刻。時空管理局本局技術部。

無人のメンテナンスルームの中央に、人一人入れるくらいの大きなポッドが鎮座していた。

その中に浮かんでいるのは、スタンバイモードのレイジングハート、ただ一つ。

昨日からマリエルによるシステムチェックが何度か行われたが、各フレームや演算処理機能、AIユニットに不備は見当たらなかった。とは言え、真に迫っていたなのはの様子を見るに、どうも気のせいでは済まされないようだと感じたマリエルは、めったに起動しない最高レベルのチェックプログラムを施行。現在十段階における四段階目の精査工程に入っている最中だった。

マリエルは現在別室で仮眠中。一応あと五時間後には検査の結果が出る筈だった。

しかし――

何の前触れもなく、『それ』は起こった。

レイジングハートが急にその光沢を強くした。

ポッドの前でデバイスのデータを逐一更新していたモニターに、異変が訪れる。

魔力係数のグラフが一気に暴れ出したかのように急上昇し、すぐに測定不能の域に達し〔error〕の表示と共にフリーズしてしまっ  
た。

途端、レイジングハートの形状が誰のコマンドも受けずして、自動的にアクセルモードに切り替わる。

誰が見ても明らかかな暴走だった。しかし、今ここにそれを止める術を持った人間は誰もいない。

魔力の奔流は止まることなく、瞬く間に桜色の光がメンテナンス  
ルームを埋め尽くしていく――

## 2話 『襲撃』 ②

「じゃあなのは、元気出してね」

「もし心細う感じたら、いつでも呼び出してきてええねんで？」

帰り道、それぞれ通学路の分岐点である公園に差し掛かったところで、フェイトとはやてがなのはに励ましの言葉をかける。

「うん、ありがとう、フェイトちゃん、はやてちゃん。もう大丈夫だから」

朝の沈んだ表情が嘘のように、なのはは二人に微笑みかける。

それを見たフェイトとはやても、どこか安心した顔を見せ、一同は別れの挨拶と共に離散した。

「……………さて、と……………」

一人になったなのはは、これからの予定を考える。

ひとまずマリエルからは、今日の午後八時頃にレイジングハートの最終チエックが終わると聞いている。

振り返り、公園の中央に据えられている鳩時計を見る。時刻は午後三時五十分。まだ四時間以上ある。

正直学校の宿題や魔法のトレーニングなど、その間にやれることはあるにはある。だが……………

「はあ……………嘘吐きだなあ、私」

恐らく今すぐ本局へ行っても、皆仕事で忙しいだろう。それでも、こんな気もそぞろな状態で他のことに集中出来る気がしなかった。そう、結局のところまだ吹っ切れてはいなかったのだ。

とは言え、もし管理局へ行ったりとしても、メンテナンスルームで四時間も待ち続けるのか？ それこそ向こう側に迷惑がかかる。自分の我が儘が周りにどんな影響を及ぼすかくらい、なのははもう分からない歳ではない。

「……………ふう……………宿題、終わらそう」

深呼吸し、今一度気分を切り替える。アリサからも言われたじゃないか。今は待つ時だ。

そう思い、臍気でありながらも今日の授業内容を思い返そうとし

た、  
その時。

ドクン、と。

なのはの心臓が、大きく鼓動を打った。

「ッ!？」

鋭い痛みさえ伴うそれに、なのはは思わず胸を押さえる。

途端、なのはの脳裏に一つのヴィジョンが浮かんだ。

突発的でありながらも、その情景はこれ以上なく鮮明であった。

先程からずっとそのことばかり考えていたから、単なる偶然なのかもしれない。しかし、なのははどうしても今の動悸と無関係であるとは思えなかった。

「……レイジング、ハート……?？」

もやもやしていた気分が一発で晴れ、なのはは急いで気のない路地に駆け込む。

嫌な、予感がした。胸騒ぎ、第六感、虫の知らせ。何でもいい。とにかく居ても立ってもいられない感じが、ひしひしと押し寄せてくる。

もしかしたらただの気のせいなのかもしれない。考え過ぎなのかもしれない。しかし、今のなのはの精神状況からして、そう片付けることはどうしても出来なかった。

周りに誰もいないことを確認し、魔法陣を展開。やたらと長い座標番号を詠唱し、急務の時に限り使用を許可されていた、管理局本局への強制転移魔法を緊急作動させる。

多分後でこっ酷く叱られるだろう。そう頭の片隅で思うが、それ以上は無視出来ないことがある。

詠唱を終えると、魔法陣が輝きを増し、なのはの全身が魔力光に包まれる。

転送は、一瞬だった。

くくくくくく

およそ十万を超える人間が暮らしているミッドチルダ首都——クラナガンは、大きく分けて三つのエリアに区分出来る。

一つが、局員や一般人が生活している居住区。何気に本局と言いつつも、この区画が全体の半分を占めている。

一つが、主に学者達が魔法の開発、実験、調査等々を行う一大区画、研究区。ここと居住区は一見して地上の街並みと変わらない造りになつており、空はミッドチルダにおける太陽——リオスの光を反射させる巨大な鏡を設置、内部の自然も地上と遜色がないほどの再現度を見せている。

最後が、一般的に管理局地上本部として認知されている中枢区である。

中枢という名の通り、クラナガンの中心部に位置しているそこは、細かく32のセクターに分割されている。それぞれのセクターが超高層ビル一つ分の広大さを持つていることから、本局内部の広大さが見てとれる。

そして今、古代遺物管理部第二支部が配置されている第6セクターは騒然としていた。

「武装局員を除く全局員は、第6セクターから最低でも二区画以上離れたセクターへ、直ちに退避して下さい。侵入者は第6セクター、C3を移動中。侵入者は武装が確認されています。武装局員は装備レベルB以上で対応に当たって下さい。繰り返します。武装局員を除く——」

サイレンと共に艦内放送が響き渡る中、クロノとセシルはようやく現場付近へと到着した。

第7セクターに通じる大きな通路で、指揮を執っている局員が二人に気付く。すぐに誰を前にしているか理解した局員は、居住まいを正して向き直った。

「クロノ執務官、セシル執務官。何故お二人がここに？」

「僕達も事態の制圧に向かう。状況は？」

「はっ、はい。現在侵入者は施設の破壊行為と共に、どこかへ向かっている様子を見せています。情報によると侵入者の数は……恐らく単独である」と

その報告を聞き、セシルは思わず声を荒立てる。

「はあ？　一人にここまで滅茶苦茶やられてるってのか？」

セシルがそう思うのも無理はない。本局に侵入者など、長い管理局の歴史の中で初めてのことである。それが複数犯によるものならまだしも、たった一人に侵入を許されるとは、武装哨戒隊の怠慢などというレベルではない。

だが実際、事は起こってしまったている。それも聞いている感じから、まだ鎮圧の目処は立っていないなさそうだ。

「も、申し訳ありません！　しかし侵入者の戦力が圧倒的で、既に把握している武装局員の被害状況が、重症四人、軽傷三十八人。幸いにもまだ死者は出ていませんが――」

不意に、クロノが不自然な魔力の流れを感じた。

それが攻撃の予兆だと瞬時に判断、即座にバリアジャケットを装着し、シールドを展開。

セシルも同じく気付いていたようで、クロノに倣い防御魔法を発動、直後に来るであろう衝撃に備える。

きっかり一秒後、目の前で爆発が起こった。

「ッ!!」

地面が揺らぎ、爆風でガラスが大破する。大小様々な瓦礫が木の葉のように吹っ飛び、回廊は一変して台風でも通り過ぎたかのような有り様になっていた。

間一髪で発動したクロノとセシルのシールドのお陰で、その場に入った局員に怪我はないようだったが……

「んー？　魔力反応は大きくなってるが、まだこの辺りじゃねえようだな……まったく無駄に広いだよここ。しちめんどくせえ」

若い男の声。恐らく侵入者のものだろう。もうもうと立ち込める黒煙のせいで姿が見えないが、クロノとセシルは完全に戦闘態勢に

入って緊張感を張り詰めさせていた。

そして、互いが対峙する。

「……一応訊いとくが、お前が侵入者だな?」

デバイスを構えながら、セシルが低い声で問い掛ける。

大穴の開いた天井の真下、穂先が三つに分かれた奇妙な形状の槍を携えた銀髪の男は、全く怯む様子を見せぬまま薄笑いを浮かべる。二人に加えて大勢の武装局員を前にしてのその態度に、一同は少なからず悪寒を禁じえない。

「はっ。だったら、どうするってんだ?」

「なら話は早い。問答無用で確保だ」

言うや否や、クロノは手にしていたデュランダルを男に向けた。

《Freezing fetters.》

デュランダルの先から、青白い魔力光が弾ける。すると男の足元に半径二メートルほどの魔法陣が浮かび上がり、その範囲内にいた男の膝上までが一瞬で氷漬けにされた。

「おっ?」

男の目が軽く見開かれる。脱出しようと足腰に力を入れるが、足裏から地面に根が張っているかのように全く動かない。それもその筈、ただの氷結効果だけでも足止めには十分だが、その上魔力付与による捕縛結界のオマケつきだ。例え砲撃魔法を食らったとしても、そうやすやすと壊れるものではない。

動きを封じた所で、クロノが叫ぶ。

「総員! バインド!」

クロノの号令に、武装隊が慌てて拘束魔法をかける。一人一人の強さは強力とは言えないが、十数人がかりのリングバインド、フープバインドは、最早男に身じろぎさえ許さない形となった。

そして絶好のタイミングで、セシルが独自の高性能ストレージデバイス——オートクレールを構え、狙いを定める。

「吹き飛ばす」

《Shoot Barrett》

純粹魔力の強力な射撃魔法が、オートクレールから撃ち出される。



ライフル弾を軽く超える速度で対象に迫るそれは、最早この距離で外れる要素など皆無。例えばバインドで拘束されていなくても、相手は直撃及び昏倒を免れないだろう。

しかし――

「ふっ！」

男が、何重にもかけられたバインドを力任せに破壊した。

流石にクロノの魔法までは潰せなかったようだが、それでも明らかに規格外の男の力に一同が瞠目する。

それだけでは終わらない。

自由になった腕を振るうと、眼前まで肉薄していたシユートバレットがまるで霧のように雲散した。

「なっ!?!」

魔力光の残滓のベール越しに、男の不敵な笑みが窺える。ダメージを与えたようには、到底見えない。

防御と言うよりか完全に無力化されたことに対して、セシルは僅かながら驚愕と混乱が入り混じった表情を浮かべる。こんな形で自分の射撃魔法が通用しなかったことなど、初めてのことである。

今度は局員側の動きが止まる番だった。彼らの奇異の視線を受けながら、それでも男は余裕を崩さない。

「さて、と。これも邪魔だな」

ぶつきらぼうにそう言つてのけると、ついには両足を拘束していた氷が音を立てて破裂した。

「!!」

この時、クロノとセシルは先程の局員の報告に偽りはなかったと確信した。

確かにこの実力差は、圧倒的だ。単独犯で重軽傷者があれだけ出たのも頷ける。魔力出力の瞬発力やその技術力。それにこれが底ではないだろう。所感としては、少なくともAAAランクは下らないとクロノは判断した。

改めて男がデバイスを構える。

雰囲気が変わり、肌を焼くような殺気が回廊に充満する。

どうやらここからが本番のようである。さつきと同じような出方で行くと、恐らくやられるのはこちらだろう。そうクロノは直感した。

一歩、男の足が前に出る。

ミッド式でもベルカ式でもない魔法陣が、男の足元に広がる。

男は嗜虐的に口端を吊り上げ、愉しそうに言った。

「さて、第二ラウンドと行こうか？」

くくくくくくく

なのはが本局に転送されると、聞いたこともない大音声のサイレンが出迎えた。

あまりのうるささに両耳を押さえる。なのははぐるりと辺りを見渡し、すぐに異常を察知した。

人がいない。いつもなら転送してきたら出迎えてくれる局員はおろか、ガラス壁の向こうのオフィススペースには照明や電子機器がつけっぱなしであるのにも関わらず、人っ子一人見当たらなかった。

すると、サイレンの音が小さくなり、幾度となく繰り返されている艦内放送がなのはの耳にも届いた。

「……………侵入者……………」

物々しいアナウンスの内容に、なのはは身を震わせる。管理局の事情にまだ詳しくないなのはでも、すぐにこれが緊急事態であると理解するのにそう時間はいらなかった。

なのはは少し考えた後、弾かれたように走り出した。

迷路のような艦内だが、技術部までの道のりは何回も行ったことがある。

最短ルートで走り抜け、ものの二、三分で到着。ここも完全に無人であり、なのはは何となく不穏な空気を感じながらメンテナンスルームに入る。

まず目に飛び込んできたのは、部屋の中央に配置されていた筈のポッドが、無残にも横倒しになっているの光景だった。

「っ！ レイジンググハート！」

なのはが慌ててレイジンググハートに駆け寄る。

ポッドは無残にも大破しており、辺りには厚さが五ミリほどある強化ガラスが散乱していた。単に横倒しになって割れたとは、到底考えにくい壊れ方である。

なのはは顔面蒼白になってレイジンググハートを抱きかかえる。すると、レイジンググハートのコア部分が僅かに光った。

《…master? (マスター?)》

レイジンググハートが反応してくれたことで、なのははひとまず安堵の溜め息を漏らす。

「レイジンググハート、大丈夫？」

《Yes. When I wake up from maintenance, things would come to this. There is no problem to myself. (はい。メンテナンスから目覚めると、こうなっていました。私自身に問題はありません)》

「なら、よかった……」

下校途中の予感が、最悪の形で的中しなかったことになのはは胸を撫で下ろした。

だが次の瞬間、そんなに遠くない所で爆発が起こった。

続いて微弱な振動がメンテナンスルームを揺るがす。恐らく、さっきの緊急アナウンスと無関係ではないだろう。そうなのはは直感した。

「……レイジンググハート」

《All right. (分かりました)》

レイジンググハートは主の言わんとしていることをすぐに理解し、短く返事をする。

これは明らかに規律違反だ。勝手に本局に転移、加えてメンテナンス中のレイジンググハートを無断使用。後から何を言われるか分かったものではない。

だが、自分の手の届く範囲で危機が訪れている。そして今、自分に

はそれに対処出来るかもしれない力がある。

もしかすると自分の力は必要ないかもしれない。しかしそれは現場に行ってみなくては分からない。もしあの時、こうしていればよかった、ああしていればよかった、そう考えるのだけは絶対嫌だった。

「――レイジングハート、セットアップ」

瞬時にバリアジャケット姿になったのは、レイジングハートを手にメンテナンスルームから飛び出す。

再び地鳴りのような轟音。

その音の発生源を探りながら、なのはは急いで現場へと急行した。

## 2話 『襲撃』 ③

「らあっ！」

「——くっ！」

セシルと男のデバイスが交差し、火花と互いの魔力光が散る。

一瞬でも気を抜くとやられる。そんな極限状態が一体どれだけ続いたのだろうか。

そんなことを頭の片隅で思いつつ、セシルは額に脂汗を浮かべて男の猛追を凌ぐ。まるで銃剣にも似た形のデバイス——オートクレールは、射撃魔法は元より、魔力の刃を発生させることで近接戦闘でも効果を発揮することが出来る。ベルカのアームドデバイスを参考にして作られた、扱いの難しい特注のストレージデバイスである。

対して漆黒の衣服に身を固めた男は、信じられないことにまだ一筋の汗すら流していない。まるでセシルの力量に合わせているかのような、そんな余裕すら窺わせるほどだ。

セシルでこの状態なのだ。他の武装隊に至っては、背後でこれ以上周囲が破壊されないように魔力でバリアを張る程度のことしか出来ない。

「オラオラどうしたあ！ まさかこの程度ってわけじゃねえよなあ！？」

そう大声で嘯く男に、セシルも負けずに覇気を漲らせる。

「調子に——乗ってんじゃねえぞ！」

魔力を乗せたセシル渾身の一撃が、男を僅かながら弾き飛ばす。そしてその隙に素早くバックステップと共に、彼へと合図を送った。

「クロノー！」

「任せろ」

セシルの後方頭上でタイミングを見計らっていたクロノが、戦闘中に密かに設置していたバインドを一斉起動する。

幾重もの魔法陣が、男の周りに矢継ぎ早に浮かび上がる。

「捕らえろっ！」

《Activation》

鎖型のバインドが、一斉に男へと襲い掛かる。

前から、後ろから、横から、上から。逃れる隙間はない。物量と速度で、振り伏せるような捕縛方法だ。

「ちっ」

《Protection》

男のデバイスが脅威を察知、全方位に魔力バリアを自動起動させる。

互いの魔力がぶつかり合う音と共に、バインドが弾かれる。だが、男はすぐに異変に気付いた。

バリアに、罅が入っている。それを目にした瞬間、バリアが一気に砕け散った。

「なっ！」

クロノはそれを見て、まずは思い通りにバインドが機能したことに安堵する。

恐らく、一対一での戦闘ならこうはいかなかつただろう。だが、セシルが時間稼ぎしてくれたお陰で、バインドに多少の防御なら貫けるほどの魔力効果を付与することが出来た。

バリアの無力化を確認するや否や、セシルが男に肉薄する。

いくら防御力が高かろうが、ゼロ距離からの射撃には耐えれまい。

男へ手の届く位置へ瞬時に移動したセシルは、オートクレールを男の眼と鼻の先に突きつけた。

そして――

「――かかったな」

男の不敵な声。

ほぼ同時に、セシルは違和感を覚える。――動かない。オートクレールが、まるで空中で縫い止められたかのようにピクリともしなくなつた。

その正体はすぐに分かった。

「っ！ 絡束盾《ホールディングシールド》だど!？」

よく見ると、男の周囲には魔力で出来た薄い膜のようなものが確認出来た。

そして悟る。防御は二段構えだったのだ。さっきのバリアは四。一度防御が砕かれたと思わせ、相手を誘き寄せるための巧妙な罠。形勢は一転、完璧なカウンターのお膳立てをされたセシルは絶体絶命の状況に陥った。

「セシル！」

焦りの声と共に、クロノが咄嗟に誘導弾を撃ち出す。

だが、時既に遅し。男は凶悪に口端を吊り上げ、セシルへとデバイスを突きつける。

意趣返し、ゼロ距離射撃。

「トリシューラ、屠れ」

《Yes, Sir》

瞬間。

「ッ!？」

ゾツ、と全身が総毛立つのを男は感じた。セシルもまた、目の前の脅威とはまた別の何かが、自分を脅かそうとしているのを、本能的に察知する。

それは、すぐに訪れた。

「——バスターツ!!」

突然、回廊の壁が局員の結界諸共粉々に吹き飛んだ。

規格外の魔力砲が撃ち込まれたとその場にいた全員が認識した時には、既に桜色の極太レーザーは男へとまともに直撃した。

「!? がっ——!」

防御力としてはあまり効果が期待出来ない絡束盾は、直射砲撃を受けて大破。すぐに急場凌ぎのシールドを展開する男だが、濁流のようなそれに押し流されるような形で反対側のガラス張りの壁に激突する。

それだけでは収まらない。厚さ十センチはある耐衝撃性の強化ガラスをも魔力砲はいとも容易く破壊し、男はガラスの破片と共に、その先にある広大な戦艦ドッグへと放り出される形となった。

「な、なんだあ……?」

辛くも寸でのところで男から飛び退き、難を逃れたセシルが目面白くさせる。

そんな彼に、頭上からこの場にそぐわない可愛らしい少女の声がかかった。

「すいません! 大丈夫ですか!」

「え? ……誰だっけ?」

二度目の対面とは言えまだ顔と名前が一致せず、眉を顰めるセシル。クロノはと言うと本来ここにいる筈のない闖入者に驚きを隠せない。

「な、なのは!? どうしてここにいるんだ!」

「ふえっ!? あ、えつと、ちよつと話せば長くなっちゃうんだけど……」

そこで、体勢を立て直したセシルが間に割って入る。

「何だっついていい! おい、さっきの魔力砲は嬢ちゃんの仕業か?」

「はっ、はい! ごめんなさい! あんなギリギリな距離で撃っちゃって」

「いや、怒ってねえよ。寧ろ僥倖だ。——ここに来たってことは、アレと戦う覚悟が出来てるってことだよな?」

セシルの言葉に、なのはは無言で頷く。まだ年齢的に二桁そこらの容姿でありながら、その表情は幾度の修羅場を潜り抜けてきた歴戦のそれだ。思わずセシルは微かに笑みが零れるのを感じた。

「なら問題ない。行くぞ、二人共。追撃だ」

「お、おいセシル」

「積もる話は後だ。とにかく今は、アレを黙らせないことには始まらない」

鶴の一声で、セシルとなのはと若干不満顔のクロノが、戦艦ドッグに突入する。

およそ二百五十メートル四方の床面積に加え、高さが百メートルほどの広々とした空間だ。現在艦船は出払っているようで、妙にがらんとした印象を受ける。



三人がドッグ内に入ると、攻撃はすぐに来た。十数もの誘導弾が、まるで生き物のように細かい軌道を描いて空を翔ける。

「あつ、あの人——」

「なのは、知ってるのか!？」

「はいっ！ 昨日、発掘現場で戦った男の人です！」

「マジかよ。お早い襲撃だな——つと！」

早々に侵入者の目的が割れ、三人の気力が一層漲る。狙いは例の口ストロギアに間違いはないだろう。ならば、確実にここで止めなければならぬ。

「クロノは引き続きバインドによる援護！ 嬢ちゃんはとにかくバンバン撃つて牽制！ ただし俺が男に近付いてる時は勘弁な！」

「了解だ」

「はいっ！」

セシルの指示を受け、三人は散開。それぞれ迎撃を開始する。

対象が三人に増えたのは勿論、開けた場に出たことで男にとっては一気に不利な状況になった。あらゆる方向から砲撃魔法や射撃魔法が襲いかかり、躲した先にタイミングよく捕獲魔法が待ち構えて男の動きを制限する。

だが、俊敏な身のこなしで何とかなのは達には食らいついている様子だが、それだけでも空戦魔導師という観点から見れば驚嘆すべき立ち回りと言えた。AAA十二人とAAAランク一人を同時に相手取れる魔導師など、この管理局でも両手で数えるほどいるかどうかというところである。

「——疾ッ」

男がクロノのバインドを叩き切り、足元に魔法陣を展開させる。

足裏に魔力を溜め、瞬間移動とも言える高速移動で一気に合間を詰める。

狙いは——なのは。

「ッ！」

レイジングハートのオートガードが起動し、多少の衝撃を感じつつもものは男の刺突を受け切る。

なのはと目が合い、男の瞳が怪しげな輝きを放つ。

「よお、また会ったなガキ」

「……貴方は、一体……」

底知れぬ何かを男から感じるなのはだが、男の視線はレイジングハートの方に向けられていた。

「——やっぱりお前のデバイスか。妙だとは思ってた。標的のサイケロッドとは別に、もう一つ共鳴対象が近くに現れてたからな。ハッ、これで一石二鳥ってわけだ」

男が何を言っているのか、なのはには分からない。

だが、なのはは本能的に嫌な予感を禁じえなかった。

まるで、自分の知らないところで自分に関係のある何かが起ころうとしている、そんな気味の悪い予感か。

と、そこでなのはの中で何かが朧気に繋がった。

確信とまでには至らないが、そう考えると大体の説明はつく。

「貴方が、レイジングハートに何か細工を……？」

「……はあ？ 何言ってるんだテメエ」

「だって、レイジングハートの様子がおかしくなったのは、貴方と最初に戦った前後のことだし……」

実際のところ、今もまた不規則な魔力の鼓動をレイジングハートからなのはは感じていた。

幸いまだ戦闘に支障が出るようなレベルではないのだが、また魔力暴走のようなことがいつ起こるのかなのはとしては気が気でなかった。

そこまで聞いたところで、男が何か感得したような表情を見せた。

「成程ね……お前、まだ把握してねえのか。そもそもお前のデバイスは——ん？」

ふと男が顔を上げる。

瞬間、男の四肢が縄状のバインドにより空中固定された。遠目にクロノがデュランダルを構えているのが、男の視界に入る。

「ハッ！ 何度も同じ真似を——!？」

先程のように力任せに脱出しようとする。だが、その動きももの

二、三秒で止まった。

力が入らないのだ。更に言うならば、力が抜けて行く感覚がする。男の顔に狼狽の色が滲み出るのを見て、クロノは確信する。今発動したのはただのバインドではない。対象の自己強化魔法を強制解除する捕獲魔法——ストラグルバインド。あまりに機動力、魔力生成速度、魔力発生速度が並外れていたので、この可能性に賭けたが、どうやら当たりだったようだ。

「セシル！」

「応！ 嬢ちゃん離れろ！」

「ツ——はい！」

既に環状魔法陣を敷き、砲撃準備を終えたセシルが詠唱に入る。

「開け、審判の門。裁きの灼雷を受け、ゲヘナにて焼かれよ」

魔法陣が、赤黒い焰と目も眩む雷電を帯び始める。禍々しくも神々しいオーラを放つそれを、男はただ見つめるしか出来ない。なのほもまた、凄まじい魔力の奔流を目の当たりにし、その様に目が釘付けになっっていた。

そして、オートクレールがベストなタイミングで振り下ろされる。

「裁け。アニヒレーション！」

無数の魔力弾が、男に向かって雨のように降り注ぐ。

それはもはや壁。射撃魔法とは言え、一ミリ足りとも隙間なく敷き詰められた弾幕は、完全に砲撃魔法のそれであった。その上、一弾一弾が必倒。故に一度着弾すれば、立て続けに食らい続ける形となる。そうなれば結果は想像に難くない。

そして為す術もなく、身動きが取れない男へと炎熱効果と雷電効果が付与された、慈悲もない魔力弾が迫る——

「遊び過ぎです、ヴァイザー」

その時、男の除く全員の瞳が驚愕と共に見開かれた。

男の盾になる形で、『それ』は唐突に現れた。真っ白いローブに身を包み、その顔までは確認出来ない。だが、セシルの魔力の三分の一を

費やした弾幕を、瞬時の内に無効化したことの方がこの場においては重大だった。

一体どこから現れたのだろうか。少なくとも、誰一人として『それ』の接近に気付くことは出来なかった。いや、接近なんてそんなものではない。あれはどう見ても、何も無いところから現れたとしか考えられない。しかし――

（魔法陣も先行魔力拡散反応《ストリーマー》も無しに、どうやって……？）

自分が言うのもおかしい話だが、まるで『魔法』のような現象に囚らずセシルの思考が停止する。

動揺が走る外野には目も呉れず、白ローブの『彼女』に男――ヴァイザーは薄笑いを浮かべて声をかけた。

「よお、目当てのモンは見つかったのか？ マテイルダ」

マテイルダと呼ばれた白ローブは、呆れた風に嘆息する。

「ここまで追い詰められるなんて、全くもつてみつともない。それとも、こんなところでサイケロッドモードを使うつもりだったのですか？」

「流石にそれはねえよ。ないない。まあちよつと危なかったが、やられたらやりかえせばいいだけの話だ。最後に立つのは、俺なんだからよ。――で？ どうなんだ？」

ヴァイザーの言に、マテイルダは事もなさ気に淡々と答える。

「貴方が好き勝手暴れてくれたお陰で、時間が稼げましたよ。既に最優先事項はクリアしました。……何やら、貴方は貴方で面白いものを見つけたようですが」

マテイルダが、少し眼を動かしてなのはの方を見遣る。

そしてなのはの視線が、『それ』と交錯した。

「ツ――」

息が、止まった。

深淵から覗き込んでくるような、闇に彩られた眼光。

まるで心臓を鷲掴みにされたような感覚に、なのはの全身から嫌な汗が噴き出る。

(何……これ……)

かつて様々な脅威を、恐れを己の勇気でなのはは乗り越えてきた。決していつも怖くないわけではない。だがそれ以上に、レイジングハートと共に培った不屈の心が、それを凌駕してきただけのことだ。だが、これは違う。

恐ろしいとか怖いとか、そういった概念で表現することが出来そうにない。

《……matter?》

「……………大丈夫。大丈夫、だから……………」

ただそこにいるだけの、根源的な『悪』。

そう、それは『悪』であった。

単純明快にして理解不能。そのような『何か』を、なのはは初めて目にした。

なのはだけではない。マテイルダから放たれる不可視のオーラに中てられ、武装隊員はおろかクロノやセシルまで体を強張らせるまでに至っていた。

「一旦、退散するとしましょう。行き当たりばったりで行動すると、上手いいくことも失敗しますからね」

「へいへい、しゃーねえな」

マテイルダとヴァイザーが軽い口調でそう話していると、ようやくセシルが動いた。まだ体は思うように動かなかったが、自分達のテリトリーでここまで我が物顔をされてこれ以上黙ってはられない。

「テメエら——好き勝手言っでんじやねえぞー！」

オートクレールが甲高い魔力の唸りを上げ、ものの一秒足らずで砲撃準備を整える。

しかし——

「——焦らずとも、貴方達時空管理局はいずれ潰しますよ。その時まで、ごきげんよう」

弾幕がヴァイザーとマティルダの位置にまで到達した時には、既に二人は消えていた。まただ。何の予備動作もない、瞬間移動。

それを確認したクロノは、すかさず空間モニターを開く。

「エイミー！ 捕捉出来るか!?!」

画面の向こうには、管制室にいるエイミーがコンソールを前に、必死に膨大なデータと奮闘している姿が映し出されている。

そして約十秒後、大きく息を吐いたエイミーはがっくりと肩を落とした。

「……ロスト。振り切られた。——あーっ、すぐに捕捉自体は出来たんだけど、一秒に三百回以上の座標転移だなんて無茶苦茶だって……こっちの処理能力では三秒が限界だよ、あんなの。……何なのあの化け物じみた魔導師達」

「それは僕達の方が知りたくらいだ……なのは、君とフェイトが戦ったのは、あの二人組なのか?」

「なのははその言葉で我に返ったように、ハッと瞳を瞬かせて、……ううん。あの真っ白のフードの人は、今日初めて見た」

その報告を聞き、セシルは苦々しげに表情を歪める。一人だけで相当厄介だったのだ。それがもう一人。いや、或いは——

「まあ大体分かったが、これで複数犯つてことが確定したわけだ。それに、アイツら二人だけってわけじゃねえだろうな」

「ああ……奴らの言動からして、背後にもっと大局的な動きがありそうだ」

現状について話し合うクロノとセシルの傍ら、なのはは脳内でマティルダが最後に言い残したことを反芻していた

『貴方達管理局はいずれ潰しますよ』

その不穏な言葉に、なのはは知らず身震いする。

管理局を潰す? あまりに荒唐無稽すぎる発言でありながらも、なのはそれがただの妄言には到底聞こえなかった。

あの人達なら、やりかねない。

そして思う。彼らの言う通り、また自分達はぶつかり合うだろう、と。

セシルと一通り話が終わったのか、クロノがなのはへと向き直る。

「とりあえず、だ。——なのは、君が何故ここにいるのか、その説明から移らせてもらっていいか？」

「あ……」

## 2話 『襲撃』 ④

被害の全容としては、合計四つのセクションが侵入者の破壊行為により、一時的な麻痺状態に陥っていた。第6セクターに至っては損壊率六十五パーセントという、まるで異世界の召喚竜でも暴れたのかと言わんばかりの悲惨な状況になっていた。

だが、暫く経って知らされた新たな事実は、前述したそれらが瑣末事であると言っても過言ではない内容だった。

「何……？ ロストロギアが奪われた？」

デスク上に現れた空間モニターの通達を聞き、クロノは耳を疑った。

クロノの前でこつてりと絞られていたなのは、思わず目を見開く。正直な話、説教が中断したので内心少しホッとしたのは内緒である。

確かに本局への通達無しの無許可転送及び、メンテナンス中のレイジングハートの無断使用。結果として強力な侵入者を追い払えたから良かったものの、それを差し引いても懲罰房へ放り込まれてもおかしくないやんちゃをやらかったことには変わらない。

胸騒ぎのことについては、迷った挙句なのは口を閉ざすことにした。自分でもよく分かっているのに、これ以上話を拗らせたくない。これは自分自身の問題だ。抱え込むことはよくないと分かっている、そう確信していたものをなのは感じずにはいらなかった。

結局のところセシルが、

「まあ俺達も助けられたことだし？ 口頭注意だけで勘弁してやろうや。規律違反はいただけじゃないが、目の前の脅威に突っ込んでく勇氣は大したもんじゃねえの。なあ、嬢ちゃん。知ってるか？ クロノが嬢ちゃんくらい歳の時なんてな——」

と見事に話を脱線させてくれたお陰で、彼の言う通り嚴重注意だけで済ませてもらえる運びとなった。



良い人だな、となのは思った。ちよつとちやらんぼらんな態度が気になったけれど。

そしてお礼を言おうとした矢先、先程の報告である。

「はい……どうやら先程の襲撃に紛れて、奪取されたとのことですよ。先程古代遺失管理部から正式な被害報告が出ました」

「おいおいおい、そのロストログアってのは、もしかしくなくても昨日のアレのことか」

セシルの言葉を受け、局員は齒噛みしながら頷く。

「……そうです。解析中のため、保管庫から出していたところをやられたようです。しかし、古代遺失管理部の方での人的被害はゼロ。襲撃に際して、局員達が数分ロストログアから目を離してしまった間に、煙のように消えてしまったと言っています」

「煙のように、ねえ……」

「それってまさか……」

「ああ、ぼく達が目の前で見た、あの白づくめの女……彼女の仕業と見て間違いないだろう」

三人はほぼ同時に、あの情景を思い出す。

未だに信じられない、完璧な瞬間移動。本局の至る所に設置された監視カメラから解析すれば、或いは何か手掛かりが掴めるかも知れないが、悔しいが現状お手上げ状態である。それにエイミィの追跡を、ものの十秒そこらで振り切る速度。今回どういう意図でロストログアを奪ったのか不明だが、あんなのが再び来襲したら本局はあつという間に機能停止に陥るだろう。

「襲撃者の詳細は？」

クロノが短く訊ねる。

「幸いにも録画した映像データから、男の面は割り出せました。今過去の犯罪者リストを洗っているところです。ただ、白ローブを着た侵入者の方は……」

「ま、一人だけでも正体掴めるに越したことはない。インテリジェントデバイス持ちの上に、Sクラスは下らん魔力量、魔力運用、機動力

——ただ者じゃあねえ。……それにあの小僧の目、眼前の何もかもをぶつ壊すことに何の躊躇も抱いてねえ目だ。あんなのが今の今まで野放しにされてたなんて、到底考えられん」

局員との通話が終わり、丁度一段落ついたところで、なのははふと口を開いた。

「あの……結局奪われたロストロギアって、何なんですか？」

捜索隊の依頼を受けた時からずっと気になっていたことだ。そして今、それを巡って思いもよらぬ方向へと事態が向かっている。

ロストロギア絡みでこう言うのも何だが、途轍もない大きな動きが起ころうとしている。そんな予感を覚えずにはいられないのは、  
だった。

クロノとセシルは同時に表情を曇らす。そしてセシルが肩を竦ませ、

「それが分かってたら、もうちよつとこっちで対策立てれたかもしれない  
なかつたんだけどなー」

「？ それってどういう……」

「今回、ぼく達にそれを知る権限が与えられてないってことさ。唯一把握している情報は、奴らが度々口にしていた『サイケロッド』という単語……恐らくそれが鍵なんだろうが——」

内線受信のコール。加えて、局内の回路から外れた個人回線での呼び出しだ。ここにかけてこれる人間は、極々限られている。

今度は何だと呟きながら、クロノが空間モニターを開く。

そこに映し出されたのは、ユーノの姿だった。

「ユーノ君？」

「ああ、なのはもそこにいたんだ。怪我とか、大丈夫だった？ なんかめちやくちや強い敵と戦ったって聞いたけど……」

「うん、平気。特に大きな怪我とかは、全然ないよ。レイジングハートも、ね」

《No problem.》

「そっか……ならよかった」

「おいユーノ。何の用事だ。いちいちなのは無事を確認しに内線寄こしたのか？」

「なっ、そういうわけじゃ——」

「へー嬢ちゃんも隅に置けねえな。ったく、こんな小さい子でも彼氏がいんのに、俺あ何で一人身で執務官なんてやってんだ……」

「にやつ!? ちよ、セシルさん!」

何だか数十分前にどこかで見たような光景だな、とクロノは他人事のように眺める。自分のこととなればイラツとするが、他人のこういうやり取りを見るのは面白いものだな、と少し邪な考えを抱くクロノであった。

「はあ……あ、そうだ、例のロストログアの件なんだけど——」

一通りいじられ、疲弊した様子でユーノはそう切り出す。クロノの眉間に皺が寄る。

「何か分かったのか？」

「残念ながら、まだ本格的な調査はまだなんだ。でも奪われる前に一通りのデータは採取したから、今からその分析に取りかかるところ。

——確かに君の言う通り、何らかの報道管制が敷かれてるのは間違いないと思う。一応古代遺物管理部から調査依頼は来てるんだけど……得た情報は完全に他言無用だと念を押されたよ。あのロストログアは、何かがおかしい。多分、意図的に情報が操作されている」

それ故の個人回線か、とクロノは納得する。

「ユーノ君も、そう思うの？」

なのはの言葉に、ユーノは首を傾げながら

「うーん、ぼくはそのロストログア自体に関しては、あまり重要度が分からないんだけど……ぼくが言っているのは、アレを取り巻く管理局上層部の対応さ。ぼくはともかく、その二人に情報開示が行われていないなんて、明らかに異常だ。例えば秘匿級であれ、執務官レベルの人間には詳細を把握しておく義務すらあるのに」

「なんかキナ臭くやってきやがったな……面倒くさいことになりそうだぜ」

渋い顔でセシルが呻く。クロノも同じ気分だった。どうしてこう、

いつもややこしい方向に事態が転がっていくのやら。

「……あまり無理はするなよ。深追いには十分気をつけろ」

「ご忠告どうも。まあ、何とか出来る限りやってみるよ」

「気をつけてね、ユーノ君。あんまり危ないことしちゃダメだよ？」

「はは……それをなのはに言われるとはね……分かった。約束するよ。でもそつちこそ、レイジングハートの具合が悪いんだろう？ 今回は何とか乗り切ったみたいだけど、無茶は禁物だからね。なのはレベルの魔導師が局内で魔力暴走なんて起こしたら、途轍もないことになるよ？」

「あう……ごめんなさい……」

墓穴を掘ったようだ。逆に心配し返され、なのはは小さくなる。

通信が終わり、クロノが何度目かも知れない溜め息を漏らす。

「とりあえず、後でマリイにも謝っておくように。騒ぎが収まってメンテナンスルーム行ったらレイジングハートが無くなって、ちよつとした発狂状態だったからな、彼女」

「うっ……そうします……」

「まああんまり落ち込むなよ、嬢ちゃん。若い時つてのはこのくらいの無茶して然るべきだぜ。俺やクロノくらい立場が上になるとだな、色々責任がついてきてそりやもう鬱陶しい——」

「セシル」

「あーはいはいそんな睨むなって」

そんなやり取りを見て、なのはは苦笑い。

とは言え色々な人に迷惑をかけてしまったのは、しっかりと反省しなければならぬ。

どうも最近色々なことが起きすぎて、冷静さを欠いているとなのはは自覚していた。普段なら焦りに身を任せて、こんなことしでかすなんて考えられないのだが……

「……………」

何か、大きな力が自分を駆り立てている。

恐らく近い内に、同じようなことが起こるだろう。

それはほぼ、確信だった。

くくくくくく

そこは、廃墟と化した教会だった。

何十年もそのまま晒されたかのような、重苦しい空気が教会堂に沈殿している。ステンドグラスは悉く割られ、そこから差し込む穏やかな月の光が廃れた内装を照らしている。

外は夜だ。今までも、これからも。ここの世界は、夜が明けることはない。

何故ならここは呪われた地。忘れられた地。かつて迫害され、虐げられ、最終的に見捨てられることとなった、悲劇の地なのだから。

「……………」

教会の身廊に、白衣を羽織る一人の赤毛の女が立ち尽くしていた。歳は二十台前半くらいだろうか。しかしその達観し切った面持ちは、とてもじゃないが外見と一致しない。

絶望、とはまた違う。それでも、気の強そうな瞳で虚空を見据える彼女は、まるで世界に対して飽いているようにも見えた。

「……………」

見上げる先——祭壇の向こう側には、巨大な石像があった。恐らく神を模して造られた、偶像だろう。恐らく天井まで届いていただろうその神は、さぞかし多くの人の願いを一心に受けてきたのだろう。

そう、それらは全て推測でしかない。何故なら、神の上半身はもう存在していない。断面を見る限り、誰かによって破壊された跡がありありと見てとれる。

女——エリス・レッドフィールドは、それを穏やかな瞳で見つめていた。

儂い。エリスは思う。何が神だろうか。所詮は造形物だ。確かに弱い人間の依り代くらいにはなるだろうが、所詮はその程度の役にしか立たない。神は人間を生かもしないし、殺しもしない。いつだって為すのは自分自身だ。

なのに、人間はいつだって神の名に縛られる。弱い人間は、そう

やって異端者を迫害してきた。それを理解出来ないを、まるで当然のように。

「下らないわね」

エリスは知らず呟く。そう、下らない。何故皆もつと『面白く』しない。何故踏み込まない。何故、新たな段階へ足を踏み入れようとしていない。

それが、エリスが『メフィストフェレス』の一員となった理由の一つだ。

「——エリス。来ていたのですか」

無から有が発生する。この女が現れる時は、いつもこうだ。心臓に悪い。

「私を呼び出したってことは、それ相応の有事ってことなんでしょよね、マテイルダ。私も暇じゃないんだけど」

好戦的なエリスの態度。マテイルダ・ルケティウスが口を開く前に、彼女の後方の闇からヴォルフガング・ヴァイザーの姿が浮かび上がってきた。

「何忙しそうに装ってんだよ。どうせお気に入り機械人形いじくつてるくらいしかやることねーくせに」

「……何？ 早々に死にたいの？ ちよつと腕っ節に自信がある程度で、調子に乗り過ぎじゃない？ 新参が舐めた口利くと殺すわよ」

「あんだと？ テメエここでケリつけてもいいんだぞアア？」

ヴァイザーがトリシューラを構える。エリスも柳眉を逆立て、己のデバイスを取り出そうとしたが、マテイルダが寸でのところで仲裁に入る。

「ああもう、二人共喧嘩は止しなさい。曲がりなりにも神の御前ですよ」

「ハッ！ なーにが神だ。アンタまだ聖職者の頃の自分演じてんのか？」

侮蔑めいたヴァイザーの言に、マテイルダは笑みを深くする。

邪悪に満ちた満面の笑みを、一層。

「いえいえ、私が言う神は世間で一般で浸透しているような、人々が苦

しんでいる時に限って何もしない無能とは違いますよ。貴方も分かっていてでしょう？ 私達が信仰する対象は、唯一『彼女』でしかあり得ないことに」

沈黙の帳が下りる。『彼女』が誰を指すのかなど、この場においていちいち確認するほどヴァイザーもエリスも野暮ではない。

「で？ 雑談は置いといて、貴女とヴァイザーと一緒にいるってことは、計画が始動したってことでいいわけ？」

「ええ。少し前倒しですが。予定外なことに『逆しまの書』の発掘が、奴らに一歩先を行かれましたね。仕方ないので、自力でサイケロッドを集めることにしました。恐らく解読に向こうは時間がかかる筈ですが、奴らが私達の存在に気付いた以上、何らかのアクションを見せてくると考えた方がいいでしょう。少なくとも機動零課はもう動いている筈です。故にこちらも対抗すべく、『彼女』の存在濃度を現世に顕現させるため——後一つ、搜索を急ぐために貴女の力を借りたいのですよ」

「あつそう……ん？ あと一つってことは、あれから一つ見つかったの？」

「見つかった、と言うか、奪い返したと言うか……とにかくヴァイザーの活躍で、何とか奪取することが出来ましたよ」

「テメエが引きこもってる間に仕事してやったんだ。舐めた口利いてる場合じゃねエのはテメエの方だぜ」

再び調子に乗るヴァイザーを、エリスは軽く一蹴する。

「ちよつと貴方は黙ってて。——新たなサイケロッドはどこに？」  
マテイルダが小型結界で封印している『それ』を差し出す。

「私が見たてでは、恐らく第三のサイケロッド、『ハスター』。対応概念は《アクゼリユス》」

「へえ……残酷《アクゼリユス》ねえ……」

エリスが恍惚とした顔で、スタンバイモードの『ハスター』を眺める。

結界越しからでもゾクゾクとした震えが、体を駆け巡る。無論それは恐怖ではない。どこまでも純粹な、好奇心故の生理的反応。

——一体このデバイスで、どれほどの悲鳴が聞けるのだろうか。

「これ、私のイングリッドに使わせていいかしら？」

「勿論。そのために貴女を呼んだのですよ。——これで、我が『メフィストフェレス』も最高の布陣で奴らに鉄槌を下す準備が出来た。喜ばしいことです」

「はあ!?　じゃあ何か?　俺はコイツのためにタダ働きたってことか!？」

ヴァイザーが喚き散らす。いちいちツッコミを入れるのも面倒くさいので、エリスは無視。マテイルダも苦笑しながら、ジェスチャーでヴァイザーをなだめる。

「なら早目に性能も兼ねて暴れさせたいところね。——次の戦場は？」

マテイルダは即答。こういう手際の良さが、エリスは気に入っている。

「ええ。もう幾つか絞り込んでいます。第24管理世界、『オルガ』、第30無人世界、『テイクシム』、第68観測指定世界、『ギリース』」

そしてその後、三つほど候補を上げ——

「——第97管理外世界『地球《アース》』」



### 3話 『変動』 ①

9 / 28 (Fri)

〈時空管理局本局・中央センター、第七執務室〉

デスクを挟んでレティに一通りの報告を終え、はやては深く息を吐いた。

その表情は暗い。自分は命じられたことをこなしているだけなのだが、その内容が内容だ。

碌な説明もなく、親友を二十四時間監視しろと言われて気分が良いわけがない。

「……………」

報告を受けたレティは眉根を寄せて思案顔のまま、ノートパソコンに何やら打ち込んでいる。

居たたまれない沈黙。悪いことはしていない、と自分に言い聞かせつつも、やはり後ろめたさが拭えない。

流石にはやて一人で身に余る任務であったので、ヴォルケンリッターの皆にも協力してもらっているのだが、当然のことながら話を聞いた時は一様にはやてと同じ反応をした。

当然だ。そんなもの、完全にプライバシーの侵害である。しかしはやてはもう時空管理局という名の巨大組織の一員。上官の命令を恣意的な理由で撥ねつけることが出来る立場ではない。

だからこそ、歯がゆさだけが募っていく。

どうして親友を——高町なのはをここまで監視する必要があるのか。

その理由が知りたいだけなのに、レティははやてに命を下してからというもの、その質問には一切答えてくれない。

「……………こうなることも、想定済みだったんですか？」

だから、はやては切り口を変えてみた。

こうなること——先日ofレイジングハートの暴走のことであることは、皆まで言わずとも分かってくれる筈である。

果たしてレティは、ようやく顔を上げてはやてと視線を交錯させた。

「いいえ——と言ったら嘘になるわね。でも、こんなにも早く変化が生じたのは完全に想定外だったわ。彼女の無鉄砲さも併せてね」

少し呆れ気味のレティの口調に、はやても釣られてやや閉口する。

まさかレイジングハートのために、あそこまでするとは思わなかった。土壇場で行動力が並外れているのは知っていたが、まだまだなのはという少女を甘く見ていたのを実感したはやてであった。

「今後も……あんなことが起こるっていうんですか？」

「それを監視するのが貴女の役目よ」

「……………」

取り付く島もないような物言いに、はやては奥歯を噛む。

と、レティが徐にノートパソコンを畳み、ようやくはやてに向き直った。

「……………ただ——」

「ただ……………」

レティは言いかけた言葉を呑み込むような仕草を見せたが、長い吐息の後に真つすぐにはやてを見据えた。

「今回はレイジングハートに影響が出たというだけで、何とかデバイスの不調として完結させることが出来たわ。だけど覚えておいて。貴女が——私達が注視しているのは、あくまでなのはさんだということを」

「……………」

その言葉の真意を瞬時に理解し、はやては瞠目する。

（つまり、レイジングハートの動作不良の原因は、なのはちゃんやとでも言うんか…………？）

俄かには信じがたい事実。しかしレティは暗にそう言っている。——なのはが危険であると。

加えてレティは直接的な表現を避け、はやてにそう伝えた。ここが管理局内であるのにも関わらず。

聡明なはやては、その意図するところに早々にたどり着く。

(やつぱり管理局で何や不穏なことが起こってる……? せやけどレティ提督で動きが制限されるような事案で、一体何が——)

考えてもみれば、レティほどの権限がある人間が管理局身内の魔導師一人監視するなんて、はやてに頼まずともいくらでも人を動かしてどうにか出来そうなことだ。

それが出来ない。

つまり、なのはと自然に接するのが可能な人間に委ねるしかないことを意味していた。

「前回も言ったけれど、正直なところ本案件は貴女とヴォルケンリッターだけでは手に余ることだとは重々承知しているわ。だけど、今はこれが最善——いいえ、これしか手がないの。勿論、機が熟したら全てお話しするわ。だからもう少しの間、よろしくお願い」

「……………」

暫し沈黙の帳が下りる。

はやてだってもう子供ではない。年齢上は確かにまだ十一歳だが、管理局に勤める身として、社会人としての身の振り方を徐々に弁えてきているつもりだった。

理不尽だって不条理だって、この先沢山ある。そう覚悟はしていた。

だが現実には、思っていた以上に残酷であり——自分の無力さを思い知るしかないものであった。

——自分は成長しているのだろうか。はやては自問自答する。

成長しているのならば、自分は今、何の感情も抱いていないのだろうか。

悩んだ末に、はやてはぼつりと呟くように言葉を紡ぐ。

「……それは、なのはちゃんにとって、幸せな解決策なんでしょうか」

はやての問い掛けに、レティは一瞬虚を突かれたように目を丸くする。

そして僅かに相好を崩し、決意の表情を露わにした。

「ええ、約束するわ」

今日ここで初めて聞くレティの優し気な声音を耳にし、そこでよう

やくはやては幾分か張っていた気が緩むのを感じた。

「……その言葉が聞けただけでも、ひとまずは安心です」

「ありがとう。……相変わらず大人びているわね。話が早くて助かるわ」

レティの言葉に、はやては苦笑する。

「いえ……私なんてまだまだです。そこまで賢ありません。自分に出来ることを何とかやっていくので精一杯ですから」

「それを自覚して行動に移している時点で、貴女は十分優れているわ。

——失礼」

不意にレティの眼前に、半透明のディスプレイが浮かび上がる。

「……………はい……………そう……………分かりました。今からこちらに向かいます」

会話が終わり、レティが立ち上がる。

「こちらの都合で申し訳ないけれど、今日はこれで解散とします。ではまた明日」

「あ、はい。失礼します」

一礼し、はやてはそそくさと退室。何だかんだでそれなりに緊張していたせいもあり、ドアの前ではあるが大きく深呼吸する。

そして、何かを決めたように口元をきゅつと結んだ。

『——シヤマル？ 今ちよつとええか？』

廊下を歩きながら、ヴォルケンリッターとはやての間だけで機能している念話魔法で、はやてはシヤマルに呼び掛けた。確か今、彼女は同セクターの医療室に出向している筈だ。

返事はすぐに来た。

『はい。はやてちゃん、どうしたの？』

——そう。自分はまだまだだ。そこまで賢くはない。

何も分からないまま、手をこまねいて待っているのはもう限界である。

再び喪うのはもう沢山だ。

だから——

『……………』

『はやてちや—ん？ あれ？ 聞こえてる—？』

『……あのな、シヤマル』

せめて、自分で出来ることは全てするべきだ。

『ちよつと頼まれてほしいことがあるんやけど——』

### 3話 『変動』 ②

なのはは桜台の林道の脇にある広場に立っていた。

いつも早朝にトレーニングをしている、お馴染みの場所である。

ただ、現時刻は夕方であり、頭上の太陽は今日の役目を終えたばかりに早々に西の方角へと沈んでいく。

肌身離さず身に付けている、スタンバイモードのレイジングハートもない。彼女(?)は今、管理局で今度こそ綿密なメンテナンスを受けている。

毎日マリイが寄越してくれる進捗状況によると、三日経ったところでオールグリーン——不具合はないとのことである。破損箇所もなし。内部に傷ひとつない。

やはり——と、なのはは思った。

なのははデバイスの専門家ではないが、長いこと一緒にいるレイジングハートのことは家族のように理解出来た。

だからこそ、レイジングハートが故障などしていないと、確信めいたものがあつた。

「はあ……はあ……」

長めの息を吐くと共に、なのはを中心として桜色の魔力光が蜃気楼のように現れ、はらはらと散っていく。

数十分間、瞑想状態で魔力をコントロールしていたせいで、わりとキツめの疲労感が体を包む。

今行っていたのは魔力の圧縮・縮小の練習だ。なのはの得意分野は魔力の放出・集束であるが、如何せん攻撃一発一発に時間がかかりすぎ、何より隙が大きいのがデメリットとして挙げられる。高威力の固定砲台が戦闘スタイルだと言ってしまったえばそれまでだが、これから魔導師として一人前になるのがなのはの目標。ピーキーすぎる性能というのも考え物だとなのはなりに考え、先人達に色々教えてもらい早一年、今日に至る。

先に述べたように、これは自分のスキルアップという面が勿論一番大きい。だが、なのはにはもう一つ理由があつた。

それはレイジングハートの存在である。

確かになのは一般人としては規格外の魔力を有していた。そしてその素質を引き出してくれた一番大きな要因は、他ならないレイジングハートだ。

彼女とは最早一心同体として認識しているし、彼女なしでの戦いは考えられない。

しかし、レイジングハートもデバイス。なのはあつての存在。

だからなのはレイジングハートがいなくても鍛錬は決して止めない。

彼女に認められる魔導師であり続けるがため、なのは己を信じて研鑽に励む。

「ふう……ちよつと張り切りすぎちゃったかなあ。暑……」

近くの大木の根本に置いているバググから、タオルを取り出して汗ばんだ額を拭う。夕方の涼しい風が心地よい。

普段はこんなになる前に、レイジングハートがストップをかけるものだが、当然ながらここに彼女はいない。

それは偏にレイジングハート不在の不安から来るものだった。なのは自身も十分自覚している。

そして、その不安を取り除く方法を、なのははこうするしか分からなかった。

不安になるのは弱いからだ。強くなれば、不安もなくなる。

レイジングハートだって、何かあっても自分が強く在れば安心してくれる。

——強く——

もつと強く——

「っ——電話……」

鞆の中でコール音が鳴り、我に帰る。ごそごそと携帯電話を取り出しディスプレイを見る。

フェイトだった。

「もしも——」

「なのは？ 今どこ？」

出し抜けに切迫したフェイトの声に、なのはは思わず面食らう。「え、桜台だけど……いつも魔法の練習してる——何かあったの？そんなに慌てて」

すると、はあくくくと心から安堵したような長い溜息が聞こえてきた。

「もう……なのはの家に電話したらまだ帰ってないって言うし、お友達誰かの家に寄ってるんじゃないのって言うけどなのはそんな予定話してなかったし、さつきから電話しても全然出ないし、本当心配したんだから。ねえ聞いてるなのは」

「あ、はい、ごめんなさい……？」

突然まくし立てるように叱られ、混乱の内にとりあえず謝罪するなのは。

通話中のまま携帯を操作し、着信履歴を見る。

(ありや……)

三十分前から五分置きに、フェイトから電話がかかっていた。

徐々に頭の回転が戻ってきて、ちよつと鍛錬に時間をかけすぎたかなど反省。

やたらと過保護なフェイトの態度だが、これには理由があった。

ヴァイザーとマテイルダとの戦いにおいて、勝手に時空転移してメンテ中のレイジングハートを持ち出したことでクロノやリンディ、マリーから叱られたのは記憶に新しい。

だが、それ以上の叱責が、帰宅したなのはを待ち受けていた。

「本当ごめん、フェイトちゃん。あれだけ言われたのにまた心配かけて……今からすぐ帰るから」

あの時、なのは宅に戻ってくるなりいきなり平手打ちを食らわされ、胸に飛び込んできてわんわん泣かれたのを思い出し、素直に謝るなのは。

心配していただろう。不安であっただろう。逆の立場なら、同じことをしていただろう——そうなのはは思った。

——本当に、最近は何かがいけない。

何か——自分以外の何かが、自分を突き動かしているような——そ



んな突拍子のない錯覚すら抱いてしまうくらいだ。

もつと周りを見て、冷静にならないと――

すると、フェイトは落ち着きを取り戻したように、声が若干か細くなる。

「あ……………うん。その……………私こそごめんね、強く言っちゃつて。なのはも不安なの、分かってるのに……………」

「ううん。謝るのは私の方だけでいいの。フェイトちゃんは気にしないで」

「でも――」

「いいのったらいいの。今回は流石に突っ走りすぎたって反省してるし……………だからフェイトちゃんがあんなに怒ってくれたの、嬉しかった」

「なのは……………」

高町なのはは非凡である。彼女に近しい人間は――特に魔法分野の界限において――大方そういった印象を抱いている。だから、彼女に対して本気で怒ったりする人間はあまりいなかった。

甘やかされていたわけではない。寧ろなのはに対して誰よりも厳しかったのはなのは自身であった。故に、誰かから何かを言われても、それ以前に自己解決してしまう節があった。

そんな中現れた、フェイトという対等な存在。

なのはと真っ向から向き合い、文字通り命を掛けた本気のぶつかり合いの中で、二人は互いを分かり合うことが出来た。

だからこそ、フェイトは時になのはに厳しく、真摯に当たる。

それが親友であるからこそ、と言わんばかりに。当然ながら、なのはもそれを分かっている。

「うん。分かった。なのはがそう言うんなら」

「ありがと。じゃあ、今度こそちゃんと帰るね」

「うん、また明日。なのは」

「また明日、フェイトちゃん」

電話を切り、ゆっくりと夕焼け空を仰ぐ。

また明日――そうだ、また明日、だ。

明日になればフェイトに会えるし、はやてにも会える。アリサやすずかにも会えて、みんなで遊ぶ予定もある。レイジングハートも、トラブルがなければ明日の早朝に戻ってくる手筈になっている。

週明けから変に立て込んだせいでペースが乱されているのは明白だ。

「ここらで色々忘れて遊んでもバチは当たらないだろう。」

「ジタバタしたって、始まらないよね」

ひとりごちて、なのはは帰る支度を始める。

先のことを考えすぎても、碌なことがない。分かっていることだが、もつと意識すべきだ。

とりあえず、今日の夕飯のことでも考えよう。

一般的な小学生らしく。

〃・〃・〃・〃・〃

時空管理局本局は眠らない。

全時空世界を管理する本局には何千人と務めており、その業務も多岐に亘る。

三桁にも上る次元世界を監視したり、加えて日々発見される次元世界の内容を調べたり、そこに魔術的要素があるのなら更なる調査を加えたり——シフト制で交代しながら二十四時間体制で稼働している。

その中でも特にエリートが集う、古代遺失物管理部も本局傘下の部署である。

扱う物が物だけに、一部の特例を除いて所属している職員は魔導師ランクB以上が必須となっている。全魔導師の上位二十五パーセントがランクB以上ということからも、その特殊性が伺える。因みにランクAが上位十パーセント、ランクS以上が上位三パーセントとなっている。

「……………」

入り組んだ、迷路のような古代遺失物管理部の廊下をレティが歩いていると、前から見知った人間が近付いてくるのに気付いた。

金色の長髪に精悍な顔立ち。しかし要所要所が鍛えられていると瞬時に見て取れるガツチリとした体躯。

史上最年少で執務官になり、空戦魔導師として『撃墜王』の二つ名を持ち、古代遺失物管理部のトップを任されている傑物。

オズワルド・シモンズ。

「これは……レティ提督。お疲れ様です」

堅苦しい態度で軽く会釈するシモンズ。レティもそれに倣う。

「お疲れ様です、シモンズ執務官」

「……このような管理局の僻地へ、何か御用でしたか？ 訪問の予定は伺っておりませんが」

若干険のある様子で、シモンズが問うてくる。時間と規則に人一倍厳しいシモンズは、アポなし訪問を何より嫌うとは管理局では有名な話である。

「いえ、特段用事があつたわけでは」

「そうですか。でしたらおかしいですね。これより向こう側には『零號』のセクシヨンしかないのですが」

当然の追及が飛んできて、レティは内心ため息を吐く。

変に言い訳しても話が拗れるだけなので、正直に言うことにした。

「——強いて言うならば、残りの『S』の様子を見に来たくらいです」  
レティが口にした『S』という単語に、ほぼ無表情だったシモンズの眉がぴくりと動く。

ただでさえ刺すような眼光が更に鋭くなる。しかしレティはたじろかない。この程度で怯むようでは、今の地位に居座ることは出来ない。

「なるほど。……『S』については、我々の部署で全て管理している。他所の人間があまり口を挟まないで頂きたい」

「そうは言っても、先日の一件のことがあります。本来ならあり得ないミスの重なりによって起こったヒューマンエラー……私の立場からしても、静観出来る事態を優に超えています」

先日的一件——皆まで言わずとも、謎の魔導師達によるロストログア強奪事件のことである。

地上本部へ輸送した矢先による、今回の出来事。該当のロストログアは、僅かな時間でありながらも精密検査のために厳重封印が解かれていた際の犯行と、レティは聞き及んでいる。

『ハスター』は想定外の事態として心得て貰いたい。『S』についての管理手順は貴女も良く理解している筈だ。それに、貴女が心配せずとも『アドラメレク』と『クトネシリカ』の管理は十全です。他部署のお粗末な警備体制とはわけが違う」

「しかし、想定外の事態は起こってしまいました。これからも何が起こるか——」

「一つ、こちらからも質問したいことが」

レティの追及を強制的に遮り、シモンズが発言する。

巖のように、堅く、揺るがない声だ。

明らかに失礼極まる態度。だが、それを押し通すだけの『何か』がシモンズからは発せられていた。

「賊によるロストログア強奪——この前代未聞の事態に隠れて、ある事が見逃されていることにお気づきですか、レティ提督」  
「……………」

思い当たる節があったレティは、しかし表情に出さず無言でその先を促した。

シモンズは続ける。

「インテリジェントデバイス、レイジングハートの暴走事件……聞くところによれば、メンテナンスルームが一室大破してしまつたとか。そして、そのマスターである高町なのは無断転移、独断専行。これらについてレティ提督のお考えをお聞きしたい」

ここにきて、ようやくレティはシモンズの思惑を読み取れた。  
（本質はそれ、か。わざわざ偶然を装い近付いてくるなんて、どういふつもり……………？）

レティが怪訝に思うも、隙を見せずに既定の返事をする。

「どうもごうも、その件については顛末書に纏めて提出済です。後で

データベースをご覧になつては？」

「いえ、それは違います」

「？ どういう——」

「私は、貴女のお考えをお聞きしたいのです。『高町なのは』を担当している、貴女自身に」

瞬間、レティの目が丸くなる。

その僅かな反応を、シモンズは見逃さない。

形勢が逆転し、一步シモンズが前に出る。

最早殺気すら感じられる威圧感で、レティに詰め寄る。

シモンズの口角が、僅かに——ほんの僅かに吊り上がる。

この状況を、楽しんでるかのよう。

「率直にお訊きしましょう——『高町なのは』は、どこまで進んでいるのですか？」

「——」

思わず声を上げそうになるのを、レティは即座に我慢。

何も知らない人間が聞けば、意味不明の言葉。だが、レティにとっては、ロストログア強奪以上の衝撃として受け止めざるを得なかった。

間違いない。

情報が洩れている。

だが、それを今顔に出すわけにはいかない。

持ち前のポーカーフェイスで、何とか切り返す。

「何のことでしょう。質問の意図が汲み取れませんが」

白々しいとレティは自分で思う。シモンズもそう思っているに違いない。

茶番のような腹の探り合い。暫し静寂が廊下を支配する。

先に折れたのは、シモンズの方だった。

「——そうですね。どうやら私の思い違いだったようですね。先走った発言、ご寛恕願いたい」

素直にシモンズは頭を下げる。それが形骸的なものに過ぎないことくらい、レティは理解していた。

レティもそれに素直に応じる。この場において、それ以上のアクシオンは悪手にしかならない。

「では私はこれで。少々急いでいるので」

「ああ、貴重なお時間を頂いて申し訳ない。では私もこれにて」

言葉こそ丁寧ながらも、二人とも視線すら交わさずに、すれ違い分かれた。

鉄面皮をそのままに、レティは歩きながら奥歯を噛む。

(まずいことになったわね)

シモンズが『高町なのは』に気付いた——これこそ想定外の事態だ。となれば、レイジングハートの正体に気付くのも時間の問題だろう。

まだこの情報は最高評議会には知られていない筈だ。何故なら、これは『逆しまの書』に記されている断片的な紙片から、レティが独自に調査して辿り着いた真実であるからだ。

それから着々とこちらも準備を進めていたが、如何せん状況の進み具合が早すぎる。

このままだと、『S』シリーズが揃うまでに覚醒してしまいかねない。

そう遠くない内に、奴らは動くだろう。その前に、最悪の事態だけは阻止しないと——

(時間がない……早く、アレを実用化させないと……)

歩みを早くして、レティは急ぐ。

自分が思っている以上に、Xデーは近いのかもしれない。